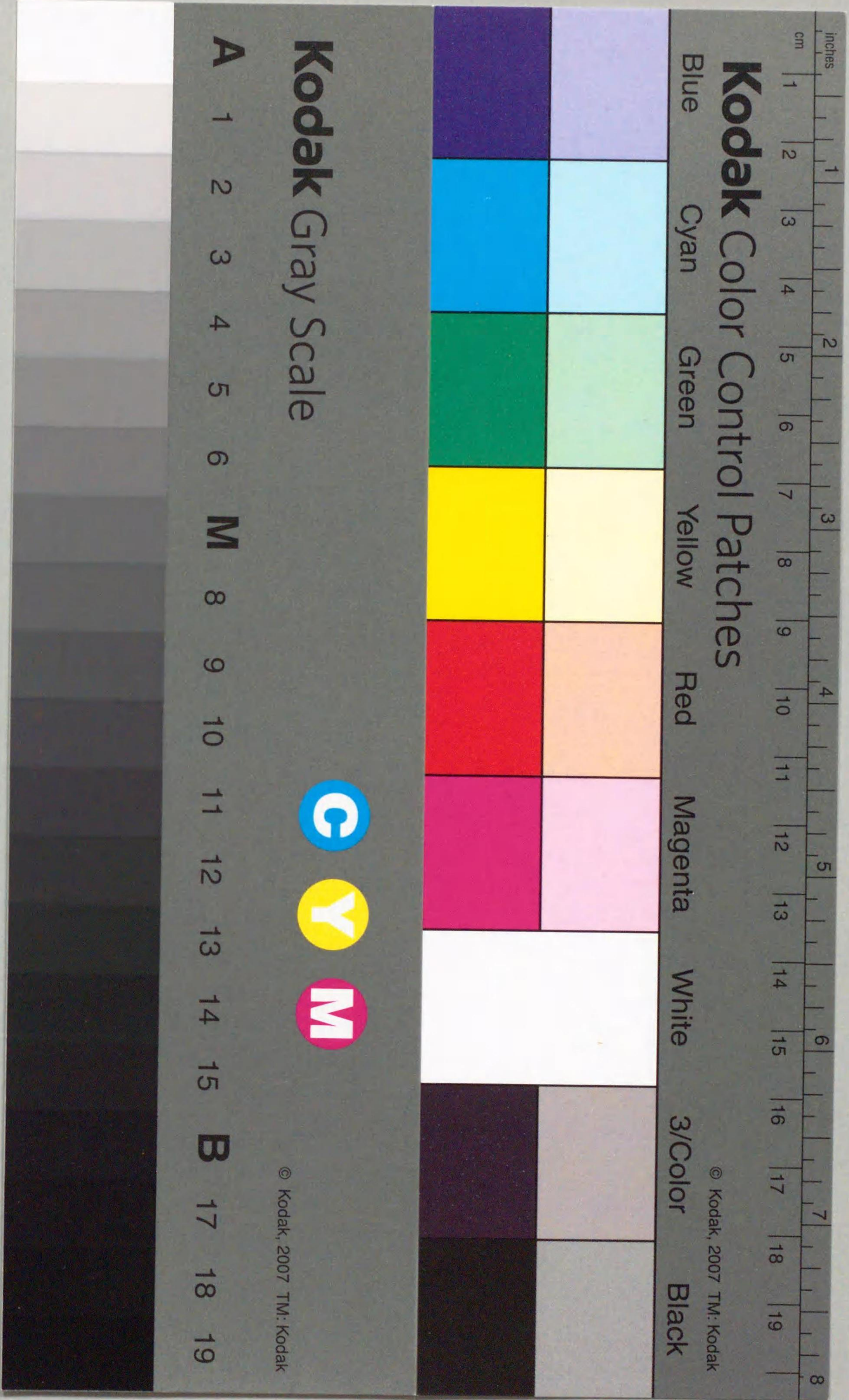


特46-810  
1200500894626

特 4 6  
810

少年日露戦史  
8. 黄海の巻  
国立国会図書館



巖谷小波編

少年日露戰史

第八編

黃海の卷

附軍國讀本第八



博文館發行



5746  
810

編  
5746

巖谷小波編



少年自露戰史

第八編

黃海の卷

附軍國讀本

卷の八

東京博文館



寄贈本

凡例

一少年日露戦史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戦争を書いた本であります。

少年日露戦史 第八編

黄海の巻目次

口 畫

第二艦隊旗艦出雲及乗組員、上村司令長官、第三艦隊の主腦旗艦日進及乗組員、片岡司令長官、第一艦隊旗艦三笠、負傷後の伊知地艦長、四大巡洋艦吾妻、千歳、常磐、磐手

本 文

第一章 珍しや敵艦の出港... 第二章 水雷艇隊の夜襲... 第三章 哨艦攻撃の鮮生角... 第四章 龍王塘と鮮生角... 第五章 三驅逐艦の勇戦... 第六章 待ちの待つた敵艦隊... 第七章 三笠の勇戦... 第八章 敵艦隊の敗走... 第九章 逃走の敵艦の最期... 第十章 ノウキツク... 第十一章 蔚山沖の海戦... 第十二章 リューリックの撃沈

録附 軍國讀本 卷の八

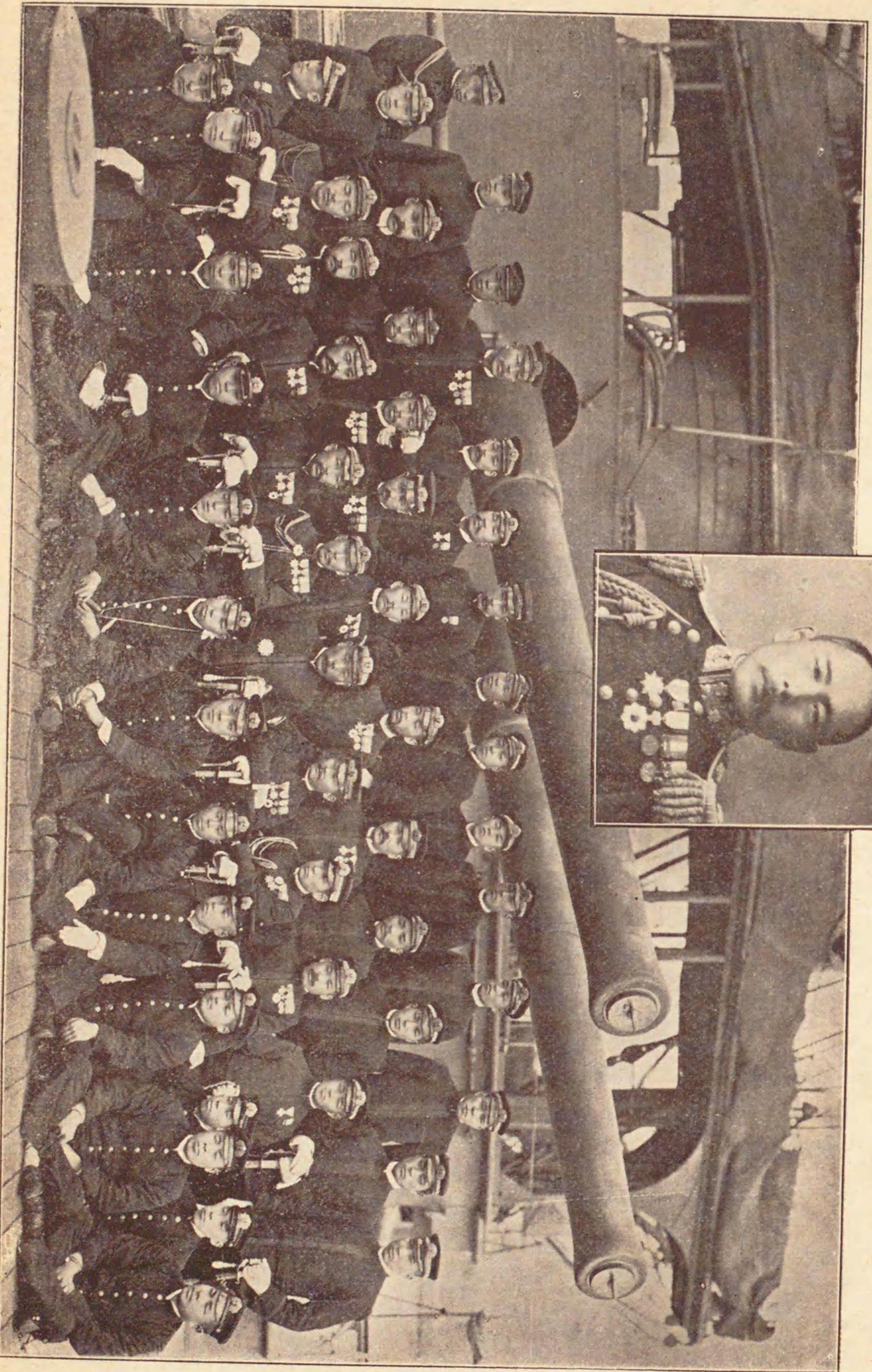
目 次

一 勇壯なる博恭王... 二 伊知地三笠艦長... 三 隠れたる司令長官... 四 上村中将の博愛... 五 軍艦名寄の歌... 六 寺島中尉の組打... 七 軍艦の説明... 八 勇士水雷を抱く

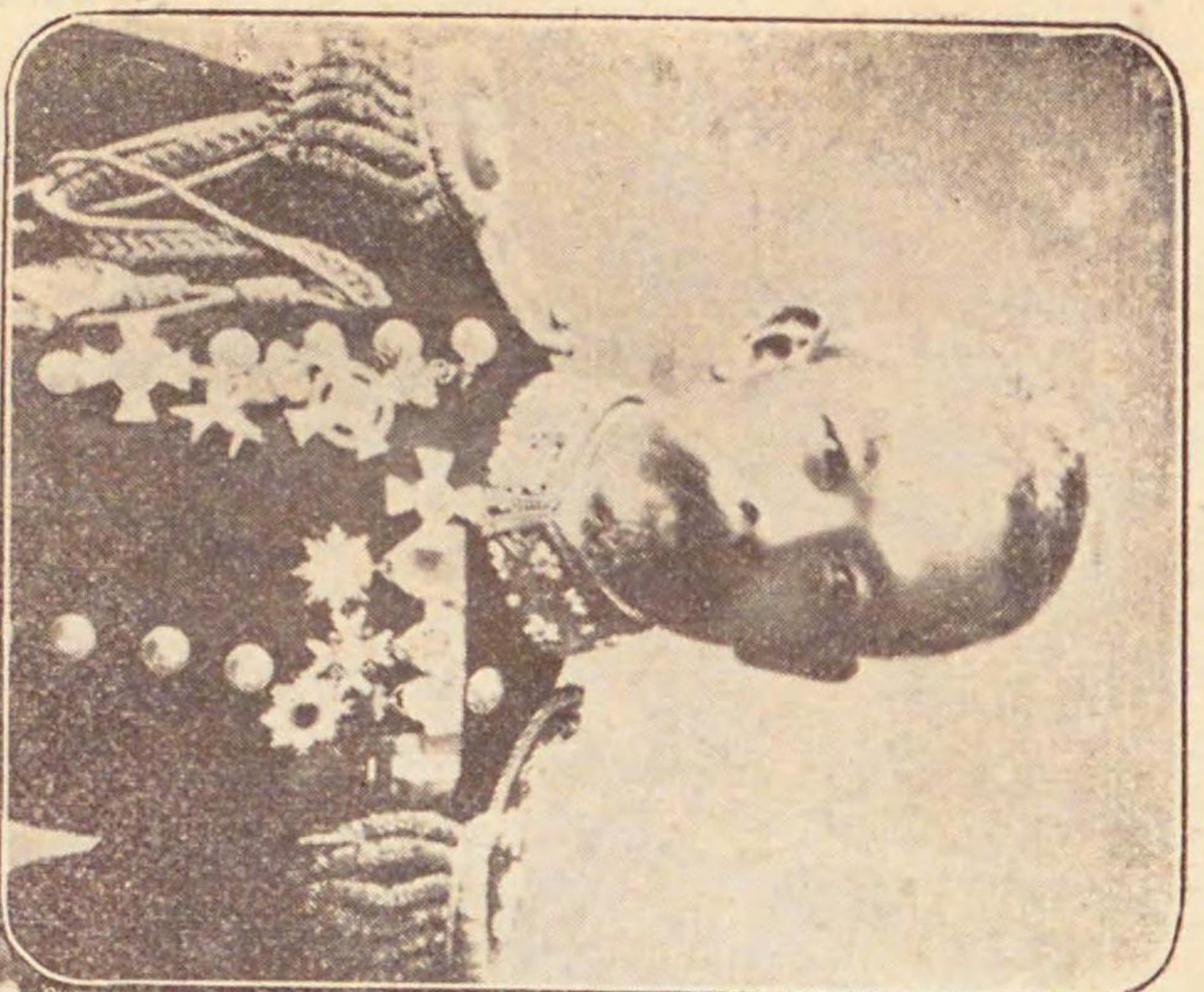
挿 畫

▲六月二十三日の海戦... ▲艇隊の夜襲... ▲黄海附近地圖... ▲驅逐隊の勇戦... ▲ツェザレキツチの慘狀... ▲レンテリスイの捕獲... ▲蔚山沖の海戦... ▲蔚山沖海戦圖... ▲リューリックの轟沈... ▲敵彈殿下を襲ふ... ▲伊知地艦長の負傷... ▲博愛敵兵を救ふ... ▲艦上の組打... ▲掃海指揮官の豪膽

官長 司令 村 上

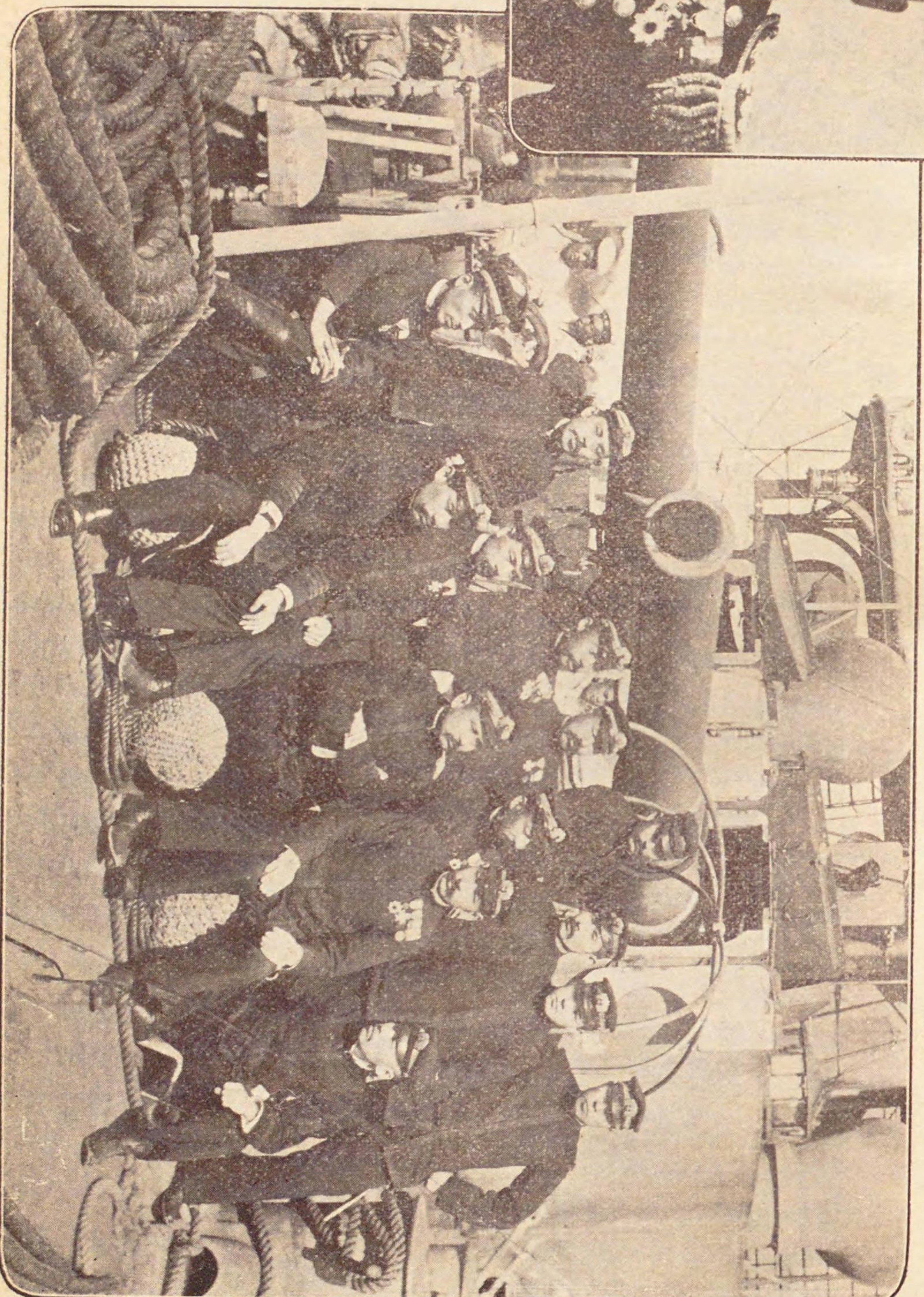


員 組 乘 及 雲 出 艦 旗 隊 艦 二 第



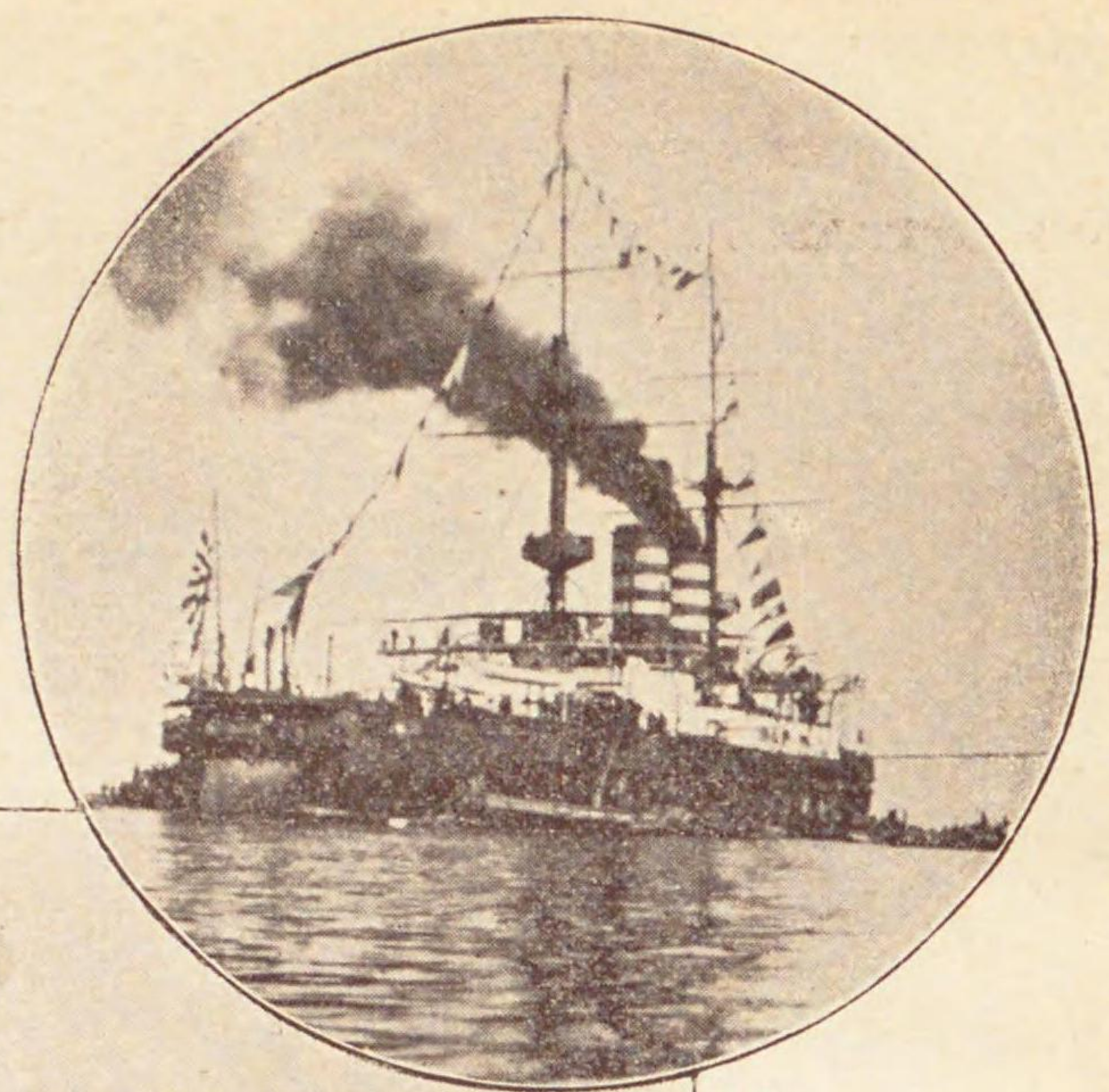
官長令司岡片

艦主の隊艦三第



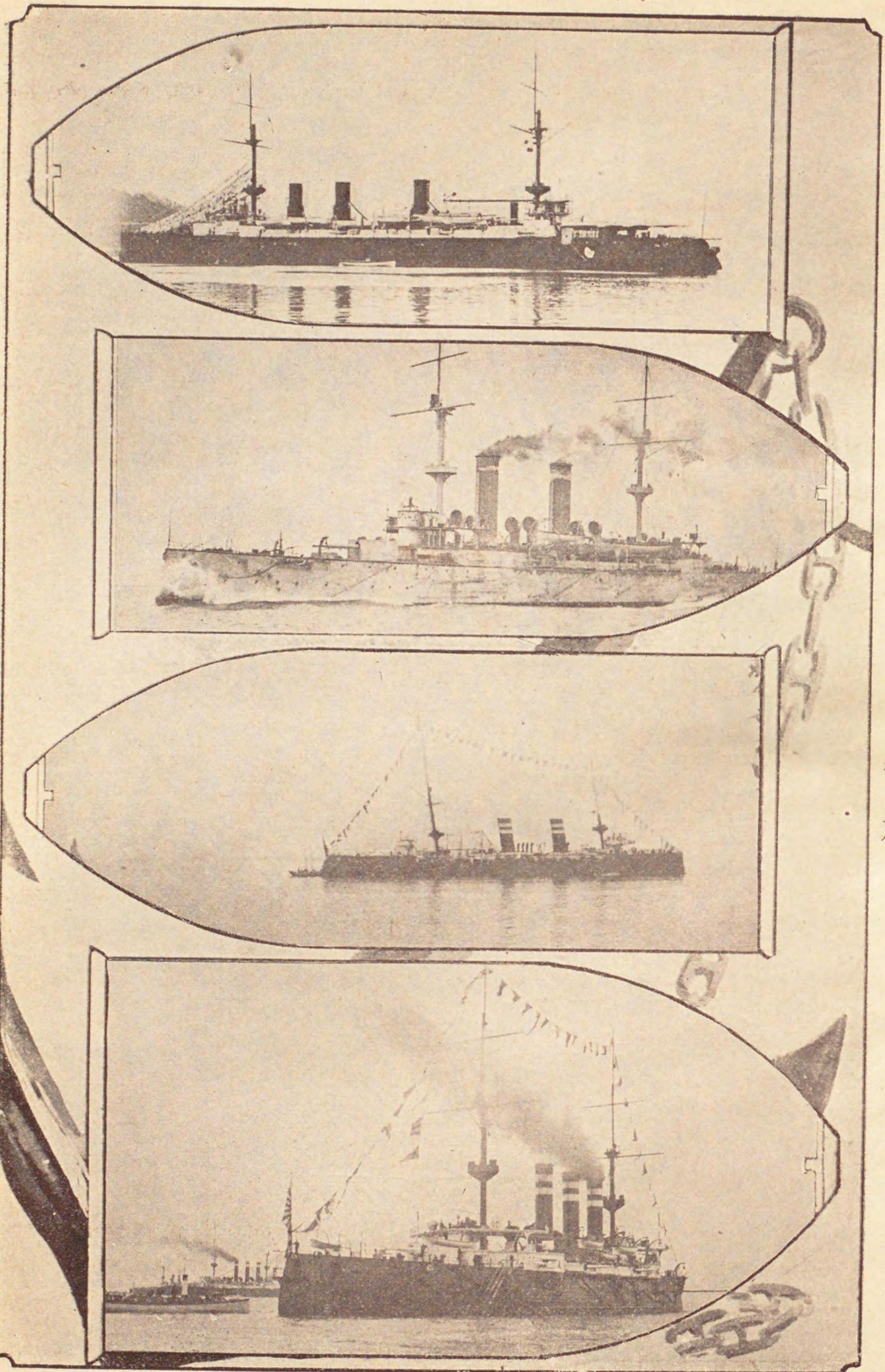
校將組乘及進日艦旗

長艦地知伊の後傷負



第一艦隊旗艦三笠

四 大 巡 洋 艦



吾妻

常磐

千歲

磐手

珍しや敵艦の出港

少年日露戦史

第八編 黄海の巻

第一章

珍しや敵艦の出港

巖谷小波編

抑も敵の東洋艦隊は、先に四月十三日、我が聯合艦隊と、旅順の沖で戦つて、長官マカロフを失つてからは、深く港の奥に隠れ、封鎖や強行偵察に出かけても、少しもその顔を見せなかつたのは、一つは我が艦隊の威力に恐れ、一つは破れた元の諸艦を、急いで修覆をして居た故であります。

第一章

一



戦艦六  
巡洋艦十五  
駆逐艦四

六月二十

珍しや敵艦の出港

で、その艦隊には、何う云ふ物があつたかと云ひますと、まづ戦艦には、ツェザレキツチ、レトキザン、ペレスキツト、ポビエダ、ポルターワ、及びゼバストポリの六隻、巡洋艦には、バーヤン、バルラダ、ヂアナ、アスコリッド、ノウキツクの五隻、その他駆逐艦が十四隻も、まだ残つて居りますから、決して油断はならぬのであります。

されば我が聯合艦隊も、例の東郷長官の指揮の下に、晝夜少しも怠らず、港外に陣を張つて、一艦でも港を出たら、目に物見せてくれるぞと、待ち構へて居りました。

すると、丁度六月二十三日の事です。敵の艦隊は、大方修覆が出来たと見えまして、午前十一時頃から、掃海汽船を先頭に立て、珍らしくも港を繰り出して来る様子です。

哨艦の通報

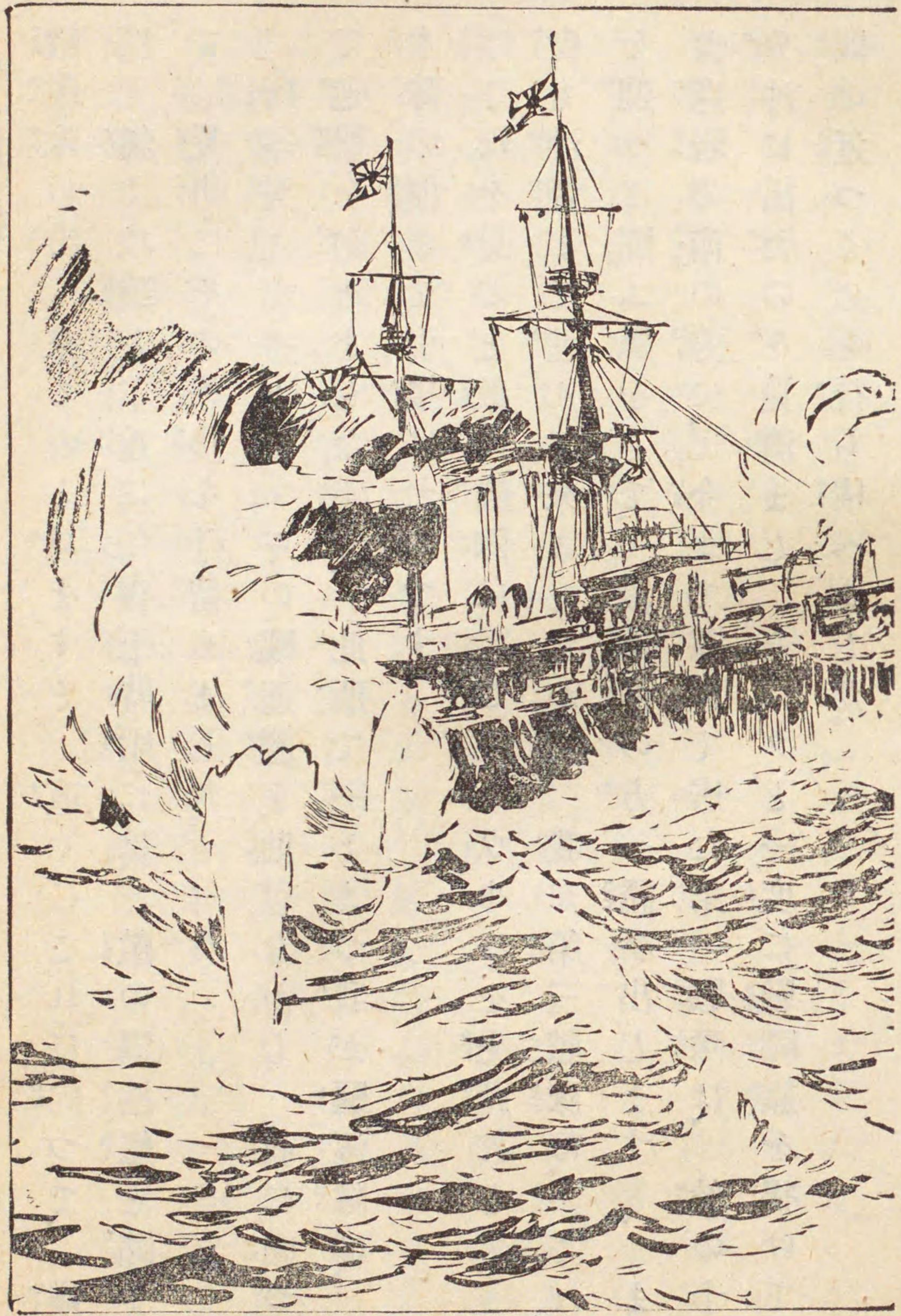
浅井大佐  
第一駆逐隊  
第四駆逐隊  
第十艇隊

第一章

まことにその港口は、我が勇敢無雙の閉塞隊が、三度も死を決して船を沈め、また水雷などを敷設して、航路を閉いだ所なのです。が、敵も一生懸命ですから、あらゆる手を盡し術を施して、沈んだ船を打ち砕き、また水雷を撃ち破り、漸く通路を明けたものと見えます。

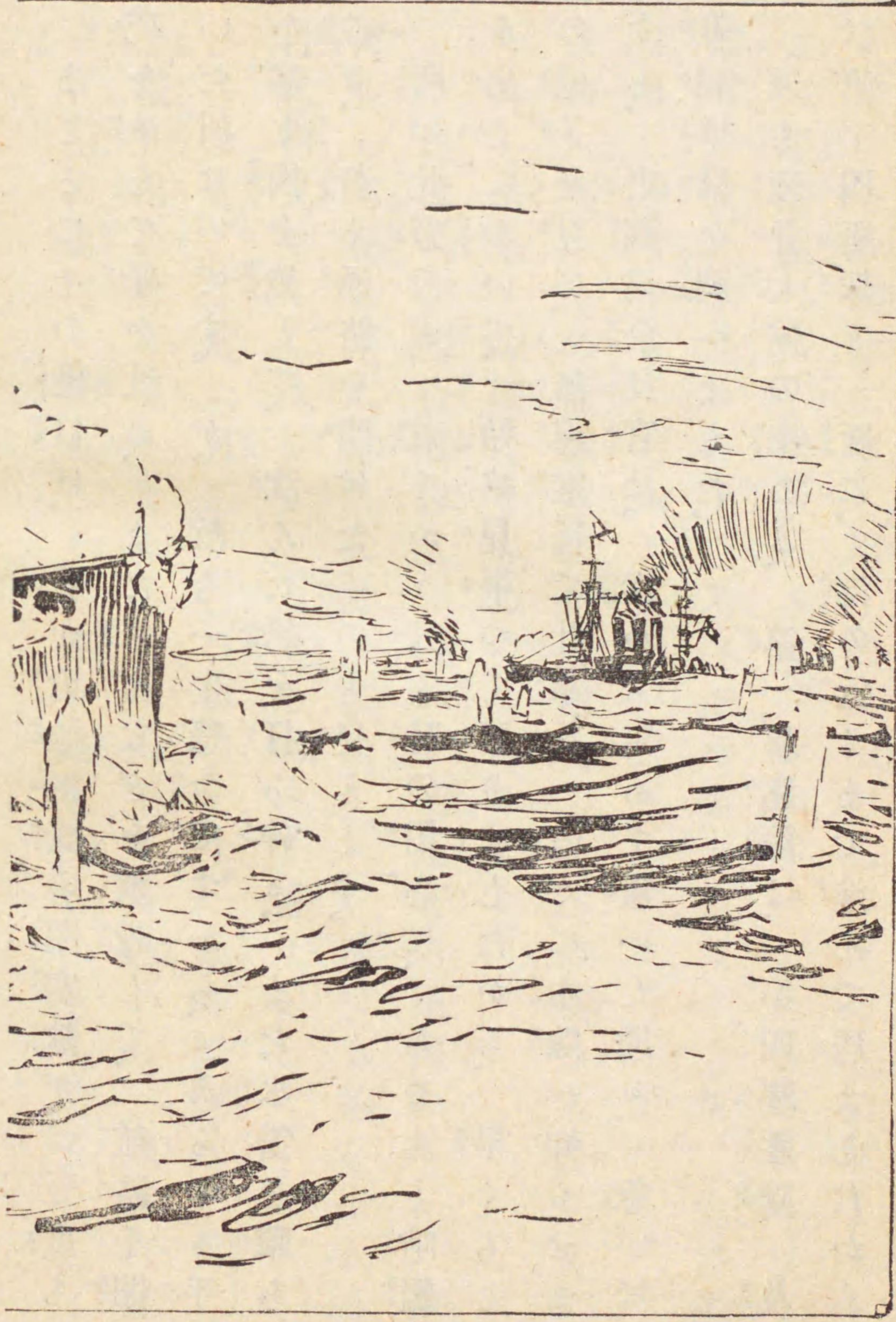
所が此方でも、兼てかう云ふ時の用心に、ちやんと哨艦を出しておいて、始終見張つて居りましたから、早くもこの様子を見て、無線電信で此事を、直ぐに本隊へ知らせますと、東郷司令長官は、常から定めて置いた通り、急いで戦艦準備を調へました。

最も浅井大佐の率ゐる、第一駆逐隊は、第四駆逐隊及び第十四艇隊と一所に、港の近くまで進んで居ましたから、



戰 三 六  
日 月 二  
の 十  
海

珍しや敵艦の出港



先頭ノウ  
キック  
第三戦隊  
遇岩の南  
第一戦隊

珍しや敵艦の出港

敵艦隊の出で来るのを見ますと、直ぐにこれに向つて、幾度と無く攻撃し、遂に午後三時頃には、敵の駆逐艦と闘つて、見事にその一隻を仕留めました。所へ又ノウキックは、その駆逐艦を助けながら、我に向つて砲撃を初めましたから、此所で一トまづ我が駆逐隊は、本隊の側まで引揚げたのです。これをみると敵の艦隊は、このノウキックを先頭にして、尙も沖合まで進んで來ましたから、我が第三戦隊は、これを迎へて闘ふ風をして、段々南の方へ誘ひ出しますと、また遇岩の南の方に、今まで隠れて居た第一戦隊は、敵の十分沖に出たのを見濟まし、それと一度に戦闘旗を掲げて、間の近づくのを待ち構へました。

城頭山の  
下

其時は、や暮近く、午後七時三十分でありましたが、やがて八時頃に成りますと、敵は何と思つたか、舵を北へと取り直して、港の方へ歸へる様に見えますから、此儘逃がして成るものかと、此方も同じく艦首を廻らして、頻りにこれを追ひました。けれども距離が遠いので、また戦闘を開きませんでした。その中には沈んで、海的面も薄暗く、水雷攻撃には持つて來いと云ふ、好い時刻に成りましたから、そこで水雷艇隊は、矢の如く飛んで行つて、激しく水雷を放ちましたから、敵は忽ち狼狽へ出し、陣形も忽ち亂れて、その爲めに港へ入る事が出來ず、仕方が無しに港の外、城頭山の下まで逃げて、錨を下ろしてしまひました。

水雷艇隊の夜襲

十六艇隊  
若林少佐  
の白鷹

第二章 水雷艇隊の夜襲

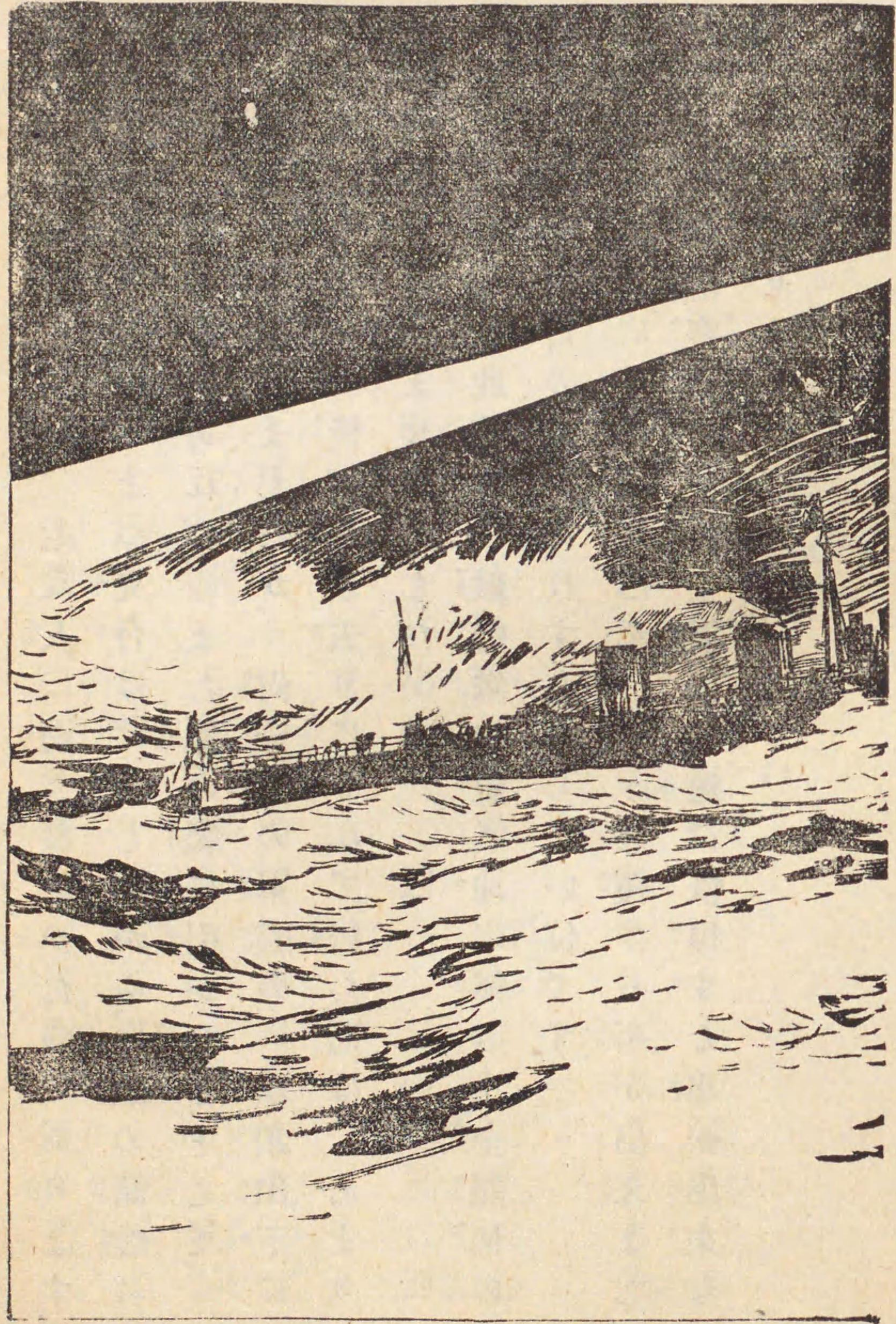
さて敵の艦隊が、港へ入り損つて、城頭山下へ逃げ込みましたのは、午後十時半頃でしたが、此の爲めに敵の要害は、無数の探海燈を照らし、また砲彈を飛ばしまして、徹夜嚴重に警戒して居りました。所を我が艇隊は事ともせず、夜明までに八度程、これを襲撃したのであります。中にも十一時半頃に向つた、十六艇隊の襲撃は、大いに功を奏しましたので、即ち若林少佐の指揮する、水雷艇白鷹號は、ペレスキツトと覺しき敵艦へ、二個まで水雷を射込みましたら、盛んに火焰を揚げながら、艦はその儘沈んで行くのを、確に見届けたと云ふ事でありませぬ。

水雷艇隊の夜襲

狭間少佐  
櫻井少佐

又其他の水雷も、それぐ、効驗があつたに相違ありませんが、何分にも敵の砲彈が、雨の様に降つて来て、それが海へ落ち込む度に、劇しく水煙が立ちますので、敵の様子が十分に解りませんでした。その中に夜が明けてしまひましたから、此時初めて調べて見ますと、彼のペレスキツトを初め、セバストポリと思はれる、戦闘艦一隻と、ヂアナ形をした巡洋艦一隻とは、自分で動く事の出来ない程、太く艦體を傷けられて居りました。

さて我が艇隊はと云ひますと、狭間少佐の白雲が、士官室と舵機を破られ、櫻井少佐の千鳥の、汽罐室に彈を受け、た位が、その首な損害で、戦死は下士卒僅に三名、負傷者



宮川少軍

水雷艇隊の夜襲

は宮川少軍醫を初め、七八人に過ぎなかつたのであります。其所で襲撃も一とまづ見合はせましたから、敵の諸艦は、或は自力で動くもあれば、また他の艦に引かれなとして、漸く港内へ引揚げましたが、尙一隻の軍艦の、城頭山下に乗り揚げたまま、後へ置き去りにされて居た形は、あまり見共好くはありませんでした。

それにしても此時の、敵艦隊の意氣地の無さ！全體何の爲めに港を出たのか、それすら解らない位です。想ふに敵は、その軍艦こそ、漸う修覆する事が出来ましたが、一旦沮喪したその士氣は、遂に恢復する事が出来なかつたのでせう。

哨艦攻撃

六月二十七日  
山田少佐

第三章 哨艦攻撃

二十三日の海戦は、敵の艦隊の總體を、うまく港外までに誘ひ出しましたが、敵の思ひの外弱い爲めに、とう／＼物に成りませんでした。

そこで同じ月の二十七日、我が第十二艇隊は、山田少佐(亨)指揮の下に、旅順の港外に出張つて居る、敵の哨艦に對して、又もや攻撃を試みたのであります。

此時我が艇隊は、夜に入るのを待つて、港口近く進んで行きますと、其所に二本檣、三本煙突の、何う見ても戦鬪艦か、一等巡洋艦とも思はれる物が、哨艦に成つて控へて居ますから、此奴好い獲物と、狙ひ濟まして覗ひ寄りまし

權藤大尉  
以下十三名  
の戦死

暗艦攻撃

たが、敵ははやくもそれと見て、猛烈に砲弾を浴せかけました。

その中を事ともせず、必死に成つて進みより、やがて水

雷を放しました。見事命中したと見えまして、山の様な

水煙を立て、恐ろしい響と共に、其儘沈んでしまひました。

すると敵の駆逐艦は、それと忽ち向つて来て、暫時砲

火を交へましたが、見る／＼中にその一隻は、またもや我

が水雷を食つて、白煙を揚げながら、同じく沈没してしま

つたのです。

まことに此夜の襲撃は、首尾好く我が勝利に歸しました

が、その代り損害も、割合に少からず、權藤大尉を始めと

して、下士卒十三名は戦死を遂げ、また負傷者には、矢野

七月八日  
内田少佐  
の第六艇  
隊の第九日  
同山下黄

中尉を併せて、都合三名と數へられました。

かくて敵の哨艦は、見事に沈めてしまひますと、敵は直

ぐに新しい哨艦を出して、港口を警戒して居りますから、

味方も亦第六艇隊を以て、これを襲撃する事に成りました。

時は七月八日の夜、内田少佐(良隆)の第六艇隊は、即ちこ

の任に當りまして、港の口まで進みましたが、何しろ其夜

は霧雨で、敵の在所が解りませんので、大きに困つて居り

ますと、やがて九日の午前五時半、中牟田中尉の五十八號

艇が、黄金山の下に當つて、アスコリッドが一隻泊つて居り

ますのを、霧の間から漸く見付け、直ちに水雷を發射しま

したが、何分霧が深いので、確な效驗を見届ける事が出来

ず、却つて敵の要害から、盛んに砲撃されるので、一とま

同十一日

龍王塘と  
鮮生角

袋の中の  
鼠

哨艦攻撃

つ引揚げる事にしました。

そこでまた十一日には、同じく内田少佐の艇隊が、再び港口に進んで行つて、ヂヤナと思はれる哨艦に、又もや水を食はせましたが、生憎十分の手應はありませんでした。けれども敵の艦隊は、我が水雷艇隊の、この大膽極まる襲撃に、幾度肝を奪はれたか知れませんが。

第四章 龍王塘と鮮生角

一體此時分は、我が第三軍の勇兵が、旅順の背面からも押し包んで、日にくその歩を進めつゝ、手強く攻め掛けて居りますから、旅順口の敵兵は、まるで袋の中の鼠であります。

七月九日

小平島

そこで彼等は死物狂になつて、せめては海の一方から、袋を破つて出やうと云ふので、動もすれば港外に出て来るのです。

で、七月九日にも、又候敵の艦隊は、バーヤン、ヂアナ、バルラダ、ポルタワ、ノウキックを初めとして、砲艦二隻に驅逐艦七隻、例の掃海船を先に立て、次第に港口を練り出し、その日の午後には、鮮生角から龍王塘の邊まで來ました。

此時我が驅逐隊の一部は、敵の掃海を邪魔する爲めに、屢々彼等を砲撃しました。その中に第三艦隊の一部も、午後の二時頃に、小平島の近邊まで出て、敵の艦隊を迎へ、バーヤンを相手にして、暫時砲火を交へましたが、午後四



給仕一人  
の負傷

要塞への  
加勢

龍王塘と鮮生角

一八

時頃に成りますと、敵は例の通り舵を回へして、港へ逃げ込んでしまひました。

此時我艦隊の損害は、驅逐艦朝汐で、給仕が一人怪我をした許り、案外約らない海戦であつたのです。

此の通り敵の艦隊の、出る度に我が艦隊に撃たれ、而も其度に恥を搔きながら、尙懲りずに出て來ますのは、一體何の爲でありませう？

想ふに彼等は、只に海の一方を破つて、此所から逃げて出やうと云ふ許りで無く、その實は海の方から廻はつて、

背面から進む我が陸軍に、猛烈な海軍砲を食はせ、そして要塞に加勢をする心算なのです。

然るに我が海軍は、またその計畫を見破つて、敵が少し

でも首を出せば、直ぐに打撃を與へますから、彼等は其都度頭を抱へて、這々の體で逃げるのであります。

然るに敵は、またこれにも懲りず、その驅逐隊の如きは、又しても港を抜け出し、鮮生角の東の灣内へ來て、此所に

潜んで居る事が、また我艦隊に知れましたから、桑島大尉の指揮をする、第十四艇隊を派遣して、これを撃たせる事

にしました。そこで桑島大尉は、二十四日の午前三時頃、深霧を侵し

て鮮生角へ向ひ、魚形水雷を連發して、その五發までは確かに爆發させましたが、その時は霧の爲めに、結果を見届

ける事が出來ず、一旦引揚げました後、改めて調べましたら、敵の驅逐艦四隻の中、一隻は煙突丈出して、水の中に

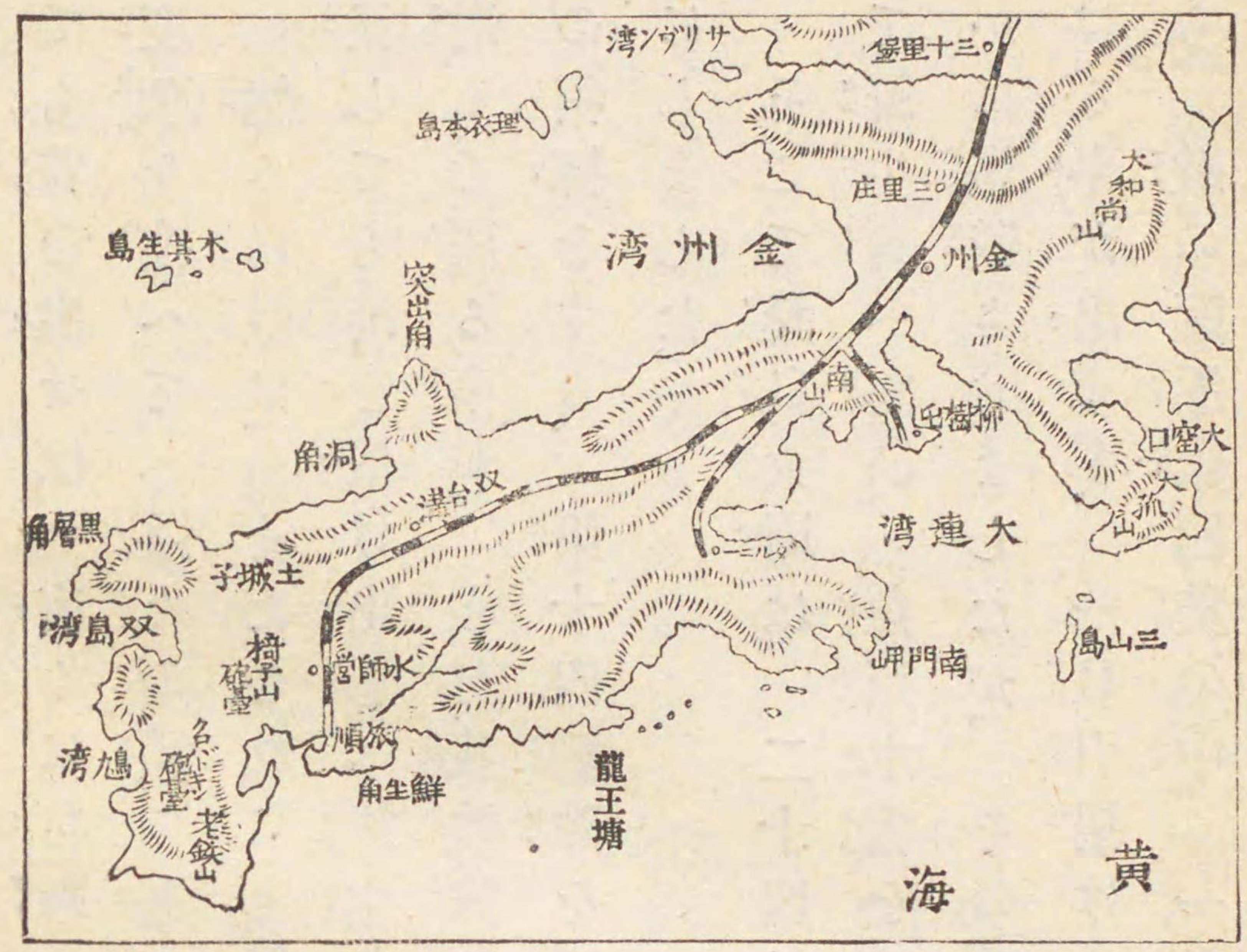
桑島大尉  
の第十四  
艇隊

七月二十  
四日

第四 章

一九

廣瀨中佐  
以下九名  
の負傷



龍王塘と鮮生角

沈んで居りましたが、何で  
もその他に、二隻は沈めら  
れて居たに相違無いので  
尤も此時の攻撃には、水  
雷艇の他に、砲艦が二隻向  
つて居りましたが、此後二  
日経つて後、又もや此の灣  
内に、敵艦の潜んで居るの  
を見付け、是と闘つて、遂  
に卒三名を失ひ、また廣瀨  
中佐順太郎、荷村少尉、外  
士卒九名の負傷者を出しま

三驅逐艦  
の勇戦

八月五日  
久津見少  
佐竹村少

したのは、まことに残念な事でありました。

第五章 三驅逐艦の勇戦

時は八月に入りまして、我が艦隊の警戒は、ますます厳  
重に成りました。それと云ふのも、陸上の我が包圍軍が、七月の末から八  
月にかけて、激しく攻撃を試みましたから、自然港内の艦  
隊が、其場に居た、まれなく成つて、必ず逃げ出すと思つ  
た故です。

されば我聯合艦隊は、更に封鎖を厳にして、毎日の様に  
敵情を偵察に行きました。中にも八月五日の事、久津見  
少佐の曙、竹村少佐の朧など、敏捷な驅逐艦は、港口間近

十四隻に  
對する三  
隻

篠原少佐

鮮生角

十四隻、  
三隊に別  
る

三驅逐艦の勇戦

三三

く進んで行つて、敵の様子を覗ひますと、敵の驅逐隊は、  
 小敵と侮りまして、總數十四隻が三隊に別れ、三方から味方  
 を押し包んで、一揉に揉み潰さうと掛つて來ました。  
 我二艦は事ともせず、まづ鮮生角の方に進んで、其方が  
 來る敵の三艦を、激しく攻撃しましたら、彼等は忽ち首  
 を回へして、港の方へ逃げ出しました。所へ篠原少佐の電  
 も、幸ひ此所へ來合はせましたから、一所に成つて敵に向  
 ひ、僅か三隻を以て、敵の十四隻を敵手に、盛んに闘ひま  
 したので、その勢に驚いて、敵はとう／＼港の内へ、皆逃  
 げ込んでしまひました。  
 艦は同じ驅逐艦。而も敵の十四隻に對して、味方はその  
 四分一にも足らぬ、僅か三隻でありました。然るにその十

七月二十  
六日より  
八月九日

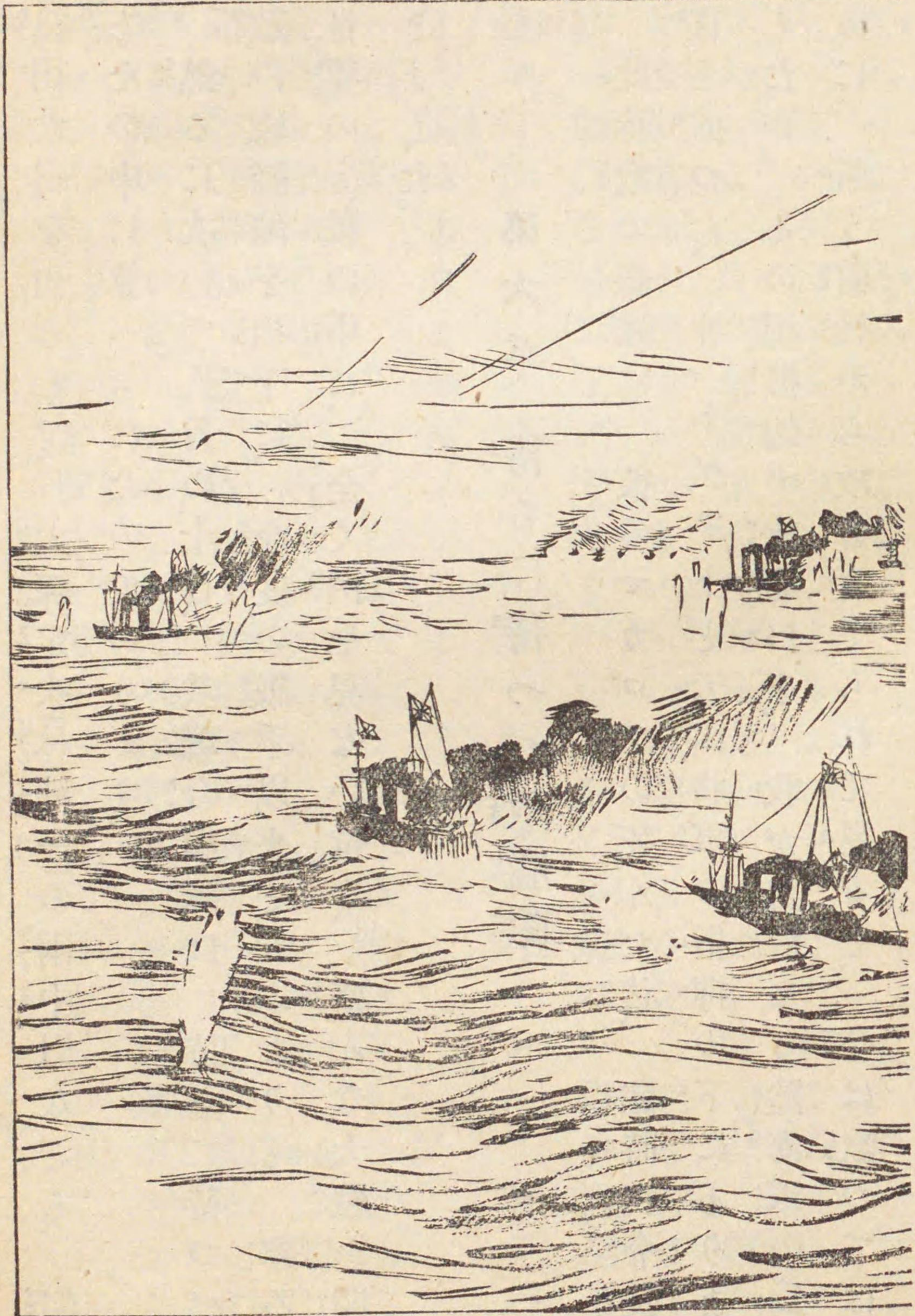
強行封鎖

我驅逐艦  
損害無し

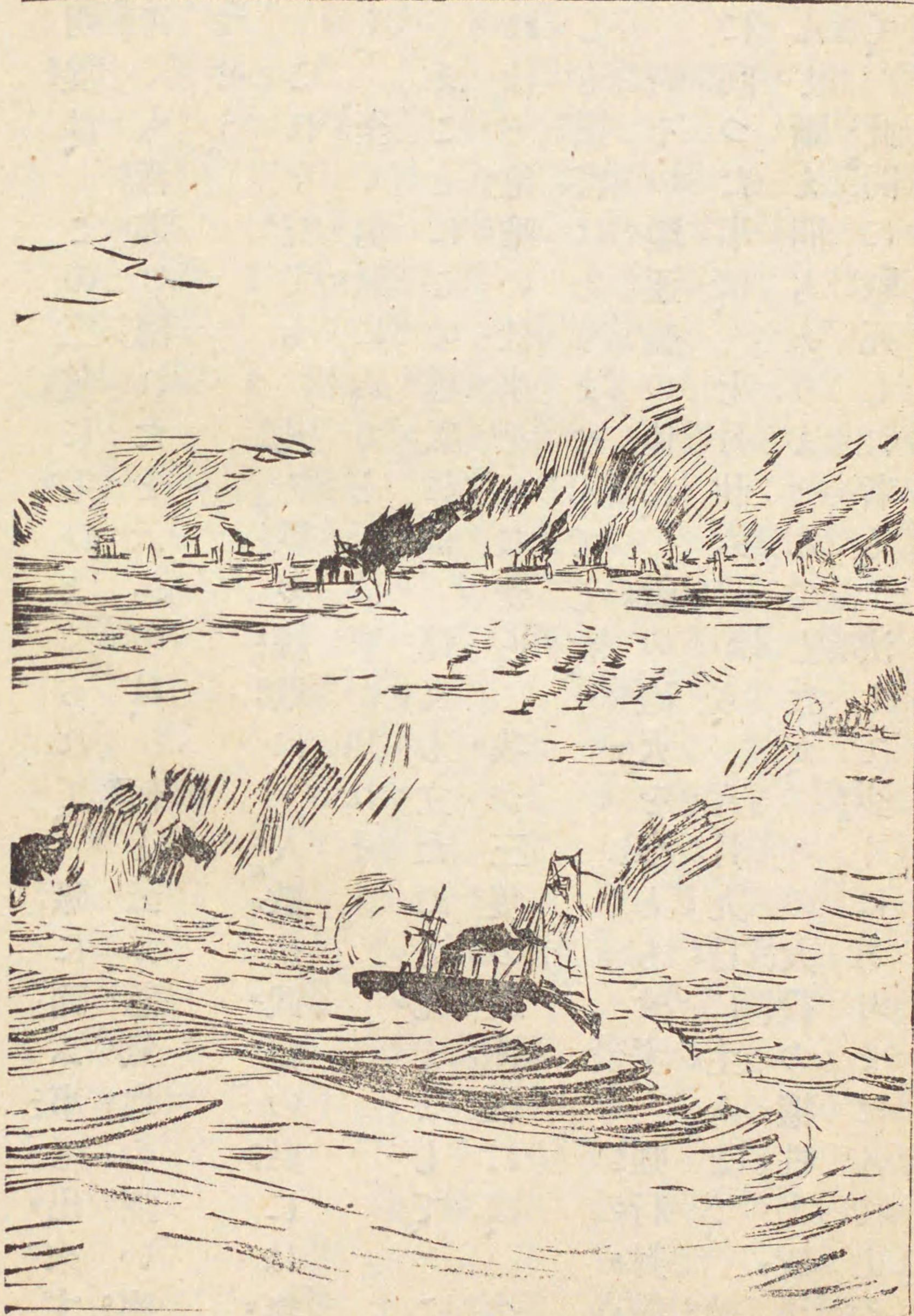
第 五 章

三三

四隻は、この三隻に追ひまくられて、碌に闘ふ事も出來ず、  
 汚くも皆逃げ隠れたと云ふのは、何と云ふ意氣地の無い事  
 でせう。  
 これを見ても、凡そ戦の勝敗は、人數や武器の數には無  
 く、全く勇氣にあると云ふ事が知れます。  
 まことにこの勇氣には、彈丸も立たぬと見えまして、こ  
 れほど危険い仕事をしながら、我が三隻の驅逐艦には、少  
 しも損害はありませんでした。  
 尙その驅逐艦の他に、敵の砲火を事ともせず、強行封鎖  
 に向つた事は、七月廿六日から、八月九日に至るまで、殆  
 んど斷え間もありませんでした。その大役の犠牲と成つ  
 て、此間に戦死した者も、決して少くはありませんでした。



驅逐隊の  
勇戦



策窮敵の三

居られなく成つたのです。一體かう云ふ場合には、彼等は何うしたら可のでせう？ 大人しく白旗を掲げて、艦隊残らず降参をするか。自か艦を爆沈させて、人も一所に自殺をするか。さも無ければ、思ひ切つて打つて出て、花々しく最期の一戦を試みて、運が好ければその隙に、何所へか逃げて行くか、この三つより道はありません。

所で彼のキットゲフトは、遂に第三の策を取り、健氣にも港を打つて出、遙かにウラジヌストクへ行くか、或は近所の中立港へ逃げ込み、中立國の規則に依て、艦隊の武装は解かれても、せめては人の命丈は、無事に助からうと試みました。これが即ち記憶すべき、八月十日の事であり

新司令長官  
ゲフト  
軍將

待ちに待った敵艦隊

八月十日

協田大尉  
以下  
の死

三驅逐艦の勇戦

協田大尉を初として、大塚(定次)林(純一)の兩中尉なども、即ちその中に算へられたのであります。

然るに、次いで八月の十日、我聯合艦隊は、待ちに待つた敵の總艦隊を相手に、今度の戦争以來と云ふよりも、寧ろ世界の海戦の中に、全く例を見ない位な、盛んな大戦を開きました。

第六章 待ちに待つた敵艦隊

此時敵の艦隊は、彼のマカロフの死んだ後、臨時司令官と成つた、井ットゲフトと云ふ將軍の指揮の下にありましたが、その根據地の旅順口を、我が勇敢なる陸海軍の爲めに、斯う前後から攻め立てられて見ると、今は黙つては

大小十八隻

待ちに待った敵艦隊

待ちに待った敵艦隊は、この十日の曉方から、そろりと港口を出て、一まづ口外に整列し、掃海船を先に立て、艦隊を単縦陣を作り、南をさして動き出しました。単縦陣とは、縦に一行に並んで行く事で、これに對して単横陣と云ふのは、横に一行に並ぶのを云ふのです。然るに彼の巡洋艦の中でも、唯一の甲装と頼まれたバーヤンは、間もなく敷設水雷に罹つて、進退の自由を失ひましたから、餘議無く外へ出て、元の港へと引返へし、また他の砲艦共は、速力が緩いものですから、これも足手纏だと云ふので、港の内にと止まつて居りました。ですから此時の敵艦は、大小都合十八隻。ツエザレキッチ

參謀長マツセキツ

哨艦の報知

を旗艦として、キッドグフト中將は、參謀長マツセキツと共に、自らこれに乗り組み、眞先に進んで來ました。かくとはやくも見て取つた、我が艦隊の哨艦は、直ぐに無線電信を以て、旗艦へ此事を告げますと、旗艦三笠に乗つて居た、東郷司令長官は、「オ、よく出て來たナ」と、につこり打ち笑ひ、直ぐに總艦隊を集めて、それく命令を傳へますと、我が艦隊の船員は、待ちに待った敵の逸出に、上は艦長參謀長から、下は水兵火夫に至るまで、何れも勇みに勇み立つて、各自に自分の配置に就き、敵の間近く寄つて來て、戦闘號令の出ますのを、今や遅しと待ち構へました。

此時我が艦隊は、何う云ふ組織であつたかと云ひますと、

甲鐵艦四  
甲裝巡洋艦四  
水雷艇六  
十

遠巻に攻める

待ちに待った敵艦隊

甲鐵艦が四隻、甲裝巡洋艦が三隻、巡洋艦が大小六隻、及び水雷艇が四十隻を以て、立派に成り立つて居たのです。が、今此の敵を相手にして、元より恐れる所はありません。が、たとひ敵に勝つたとしても、その爲めに味方の艦隊を、多く損じては約りませんから、智謀に長けた東郷長官は、まづ此邊に意を用ひ、敢へて急には手を下ださず、却つて遠巻にこれを圍んで、始めは大きな砲の力で、十分敵を苦しめて置き、その中に機會を見て、近く敵陣に迫つて行つて、一舉に撃破らうと考へたのです。容易に火蓋を切らず、わざと怯怖を見せる様に、成るだけ廣い外洋の方へと、敵を誘ひ出しました。

三十海里の沖合

三笠の勇戦

遇岩の近所

第七章 三笠の勇戦

すると敵は、その計畧を少しも知らず、おめく誘ひ出されながら、旅順口を去る事、凡そ三十海里の沖まで來ましたのは、已にその日も正午過ぎて、一時近く成つて來ました。只見れば我が艦の檣には、はや戦鬪旗の掲げられて、そよ吹く黄海の沙風に、さも勇ましく翻つて居ります。

かう成つては敵の艦隊も、覺悟を極めた見えまして、次第に味方に近づき、遇岩の近所まで來ましたから、時分は好しと旗艦三笠は、直先に砲門を開きました、まづ此方から名乗りかけますと、彼方も同じく之に應じて、ズドー

萬歳の聲  
に鳴渡  
る海

三笠の勇戦

ンと一發撃ち返へし、續いて雙方の各艦から、我劣らじと打ち出しました。その物音の凄まじさは、今まで晴れ渡つて居た空に、忽ち幾千の雷を落として、壯快とも猛烈とも殆んど形容に辭の無い位です。

が、此方は元より手練の砲彈、一として空は無く、打てば必ず反應がありますので、其度に萬歳の聲は、大砲の音にも劣らぬほど、海上に鳴り渡りましたが、敵の彈はそれに反して、多くはその照準を誤り、つひ艦の側まで來なから、空しく波に落ちてしまひました。

尤も海軍の戦争は、艦と艦とが向ひ合つて、雙方動かずに撃ち合ふのではありません。敵も味方も陣形を作つたま、始終海上を運動して、その雙方から行き合ふ時に、互

合戦二回

伏見若宮  
殿下

第七章

ひに發砲して鬪ふのが法です。

されば此時も、互ひに艦脚を速めて、入れ違ひながら鬪ふ事二度。そこで一旦遠かつて、互ひに息を休めましたが、一時間餘り経つて、再び雙方から進み寄り、盛んに砲火を交へる事、又凡そ三十分許りで、何と思つたかその進路を、急に東南に移しましたから、此方も同じく追ひ縋つて、これを攻め立てやうとしますと、彼方も死物狂に成つて、各艦申し合はせた様に、我が旗艦の三笠を目がけて、激しく砲彈を浴びせました。

此時この三笠には、東郷長官は云ふに及ばず、畏くも伏見若宮元華頂宮殿下も、分隊長として御乗組でしたから、さてこそ敵も始めから、是を一番目指して居たのです。



戦死者殖  
田少佐、  
藤瀬中尉、  
川二坂本尉、  
畑少尉、  
下士卒三  
十名

第三艦隊  
片岡司令  
長官の奮  
戦死者齋  
藤機關大  
監

三笠の勇戦

然るにこの三笠は、我が帝國の戦闘艦の中でも、一番新  
しく、而も一番丈夫な艦です。これ程弾を受けまして  
も、艦體は餘り損じませんでした。が、その乗組の此爲め  
に、名譽の戦死を遂げたものは、決して少くはありません  
でした。藤瀬、品川の二中尉、畑、坂本の兩少尉を初め、  
下士卒三十名許りは、即ちその中に算へられたので、また  
參謀少佐殖田謙吉も、其時の負傷の爲めに、後に死んでし  
まつたのであります。

三笠に次いで奮戦をしたのは、第三艦隊の旗艦として、  
片岡司令官の乗て居た、日進艦でありましたが、此所に  
も齋藤機關大監利昌高村、橋本直吉横山傳の三少佐、倉田  
大主計、川本少尉など、皆敵弾の爲に斃れました。

八雲、春  
日の損害

伏見若宮  
殿下、伊  
地知三笠  
艦長、小  
山田、小  
倉少佐、  
等倉山の  
負傷

其他八雲、春日の二艦にも、死傷は少くありませんでし  
たが、皆下士卒以下の者で、將校は幸ひ一人も無かつたの  
です。

また負傷者の中には、恐多くも伏見博恭王殿下を始め奉  
り、三笠艦長伊地知彦次郎、幕僚小山田、小倉の兩少佐ま  
で、指を屈せられる位ですから、亦戦闘の激しさも想ひや  
られます。

殊に殿下御負傷の時などは、二十餘發の敵弾が、引きも  
切らずに御側へ飛んで来て、見る／＼中に御部下の死體は、  
前後左右に算を亂して、あはや殿下の御身さへ、今は風前  
の燈と見えしました。

けれども殿下は少しも屈し賜はず、御元氣日頃に百倍し

敵望遠鏡  
に中る

三笠の勇戦

三六

て、頻りに號令をかけて居らつしやいますと、忽ち躍り込  
 んだ敵弾が、物に當つて碎けたと思ふと、その勢で弾片の  
 一個が、殿下の左の御胸を撲ち、會釋も無く殿下をば、其  
 場へ取つて投げました。  
 部下の者共は驚いて、直ぐと殿下を助け起し、御介抱申  
 上げて見ますと、こは如何に、今の弾片は、殿下の肩から  
 吊つて居らしつた、望遠鏡に當りました許りで、御身には  
 何の御怪我も無かつたのです。かく迄御奮戦遊ばされた、  
 御勇氣の程は申すに及ばず、その御武運のめで度さは、只  
 感じ奉るの他はありません。  
 否、武運の事を云へば、彼の東郷大將は如何に？彼は實  
 に司令長官として、此の三笠の艦橋に立ち、望遠鏡を手に

敵艦の敗走

第八章 敵艦隊の敗走

しながら、雨と降る砲弾の中を、泰然として號令を傳へ、  
 十數隻の軍艦を、手足の様に働かして居りましたが、やが  
 て轟然と飛んで来た弾丸が、恰も大將の側に居た、伊地知  
 殖田の諸將校を、見る／＼中に撃ち例しましたのに、大將  
 は身に擦傷だに受けず、よく此の大戦を指揮して居たと  
 何と云ふ運の強い事とせう！

武運も實力も、共に古今に絶したと云ふべき、東郷大將  
 を長官に戴く我が聯合艦隊の勢、元より敵のある譯はあ  
 りません。

されば我旗艦三笠の、かくまで敵に見指されたと同じく、

第八章

三七

敵司令官の戦死

敵艦隊の敗走

三八

また我が艦隊に於ても、敵の旗艦ツェザレキッチを、何で見免がして置きませう。

「あれこそ新司令長官、キットゲフトの乗る船ぞ。いで日本海軍の本事を見せて、彼奴もマカロフの跡を追はせてやれ！」と、先刻からこの旗艦を的に、八方から激しく撃ちかけて居りましたが、元より手練の我が砲手に、かう狙はれてはたまりません。やがてその一發が、その艦上に破裂したと思ふと、憐む可し其時まで、其所に指揮を取つて居た司令長官キットゲフトは、忽ちその全身を、海の中へ吹き飛ばされ、残るはその片足ばかり。

彼は此方の注文通り、今や一本足に成つて、場所は變らぬ黄海に、四月十三日の藻屑と成つた、彼のマカロフを追

キットゲフトの大損害

ひかけたのであります。キットゲフトが討たれると、參謀長マツセキチが、代つて指揮をして居りましたが、是も續いて來た弾に、重傷を受けて進退を失ひ、其他艦長幕僚まで、或は斃され、或は傷つき、遂には航海長が立つて、全艦の號令をする様に成りました。

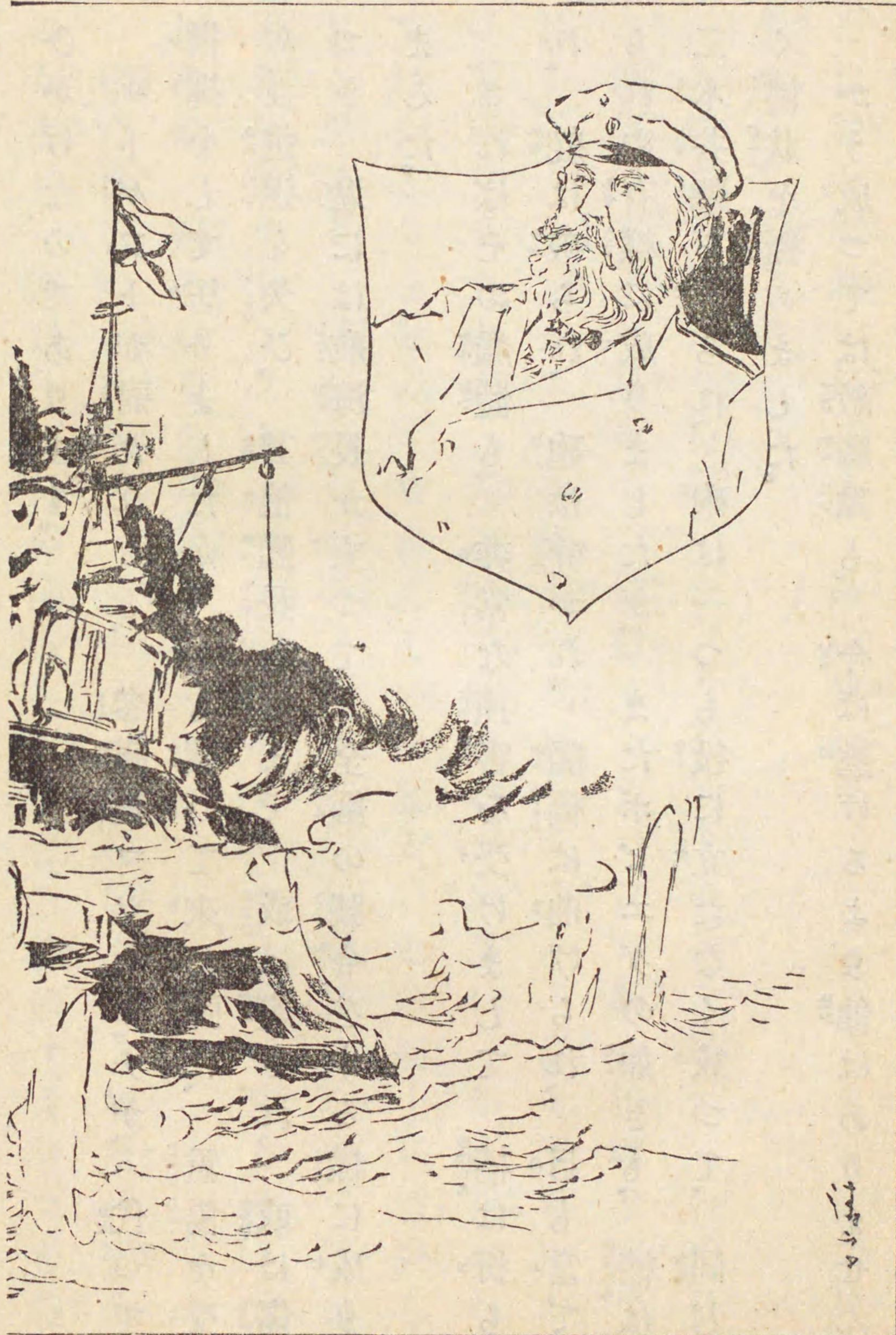
さればその艦體も、非常な損害を受けまして、檣は折られ、舵は破られ、砲は碎かれ、艦橋は曲げられ、目も當てられぬ有様に成りましたが、またポピエダの如きも、檣は二本共撃ち折られ、砲は一つも役に立たなく成つて、同じく慘狀を極めました。かう成つては敵艦隊も、今は逃げるより他はありません。

第八章

三九



キツエ  
ツエ  
チザ  
のレ



驅逐、水  
雷兩隊  
夜襲

すると敵の艦隊は、はやくもこの暗さに紛れて、まるで蜘蛛の子を散らす様に、一目算に逃げ初めましたから、東郷司令長官は、直ぐに驅逐艦水雷艇を、旗艦の側へ呼び集め、「急いで襲撃せよ」と命じました。

晝の間の海戦には、わざと後に控へて居た、驅逐水雷の兩隊は、「是からは乃公達の舞臺だぞ」と、勇み立つて此の命を受け、逃げ出す敵の艦隊に向つて、息を次がせず追撃しました。その働きの敏捷さは、さながら手負猪に向つて、獵犬の群の躍りかゝるが如く、忽ちツエザレキチに向つて、一發放した水雷は、確かに命中したと見えて、只さへ疲れに疲れた艦は、更に片息に成つて逃げ出しました。

敵の陣形  
亂る

ソレトキザ  
の勇戦

そこでツエザレキチは、我が十二吋砲を横腹に受けて、左の方に傾きながら、辛くも舵を廻へしみますと、今までそれに續いて居た諸艦は、衝突してはたまらぬと、思ひ／＼に舵を曲げて、急いで列を離れましたので、初めの陣形は忽ち亂れ、足元死途路に成りましたから、此機逸す可らずと、此方は隙かさず追詰めて、一層激しく撃ち立てましたが、其爲めに敵の諸艦は、更に周章て騒ぐ許りで、はや發砲する元氣もありません。

此時に只レトキザン許りは、感心にも踏み止まつて、時砲弾を飛ばせて居りましたが、その中には日は暮れて、面が暗く成つて來ましたから、今は是までと、此方も發砲を止めました。これは八時半頃の事です。

逃走の敵艦

レシテリ  
ヌイ號芝  
采へ遁込

敵艦隊の敗走

第九章 逃走の敵艦

元より狼狽を極めた敵艦隊、かう成つては四分五裂です。その一部分は、辛くも旅順口へ逃げ込みましたが、他は何れも中立港をさして、一生懸命に走りましました。中には驅逐艦レシテリヌイは、十一日の夜明頃、清國の渤海灣にある、芝罘と云ふ港へ逃げ込み、烟臺山の下まで来て、此所に錨を卸しました。然るに中立國の規則として、交戦國の者は、たとひ餘儀無く追ひ込まれて来ても、二十四時間より長く留める事は、決して出来なない事に成つて居りますから、其所で清國北洋水師提督、薩鎮藩と云ふ人が、二度までレシテリヌイへ來

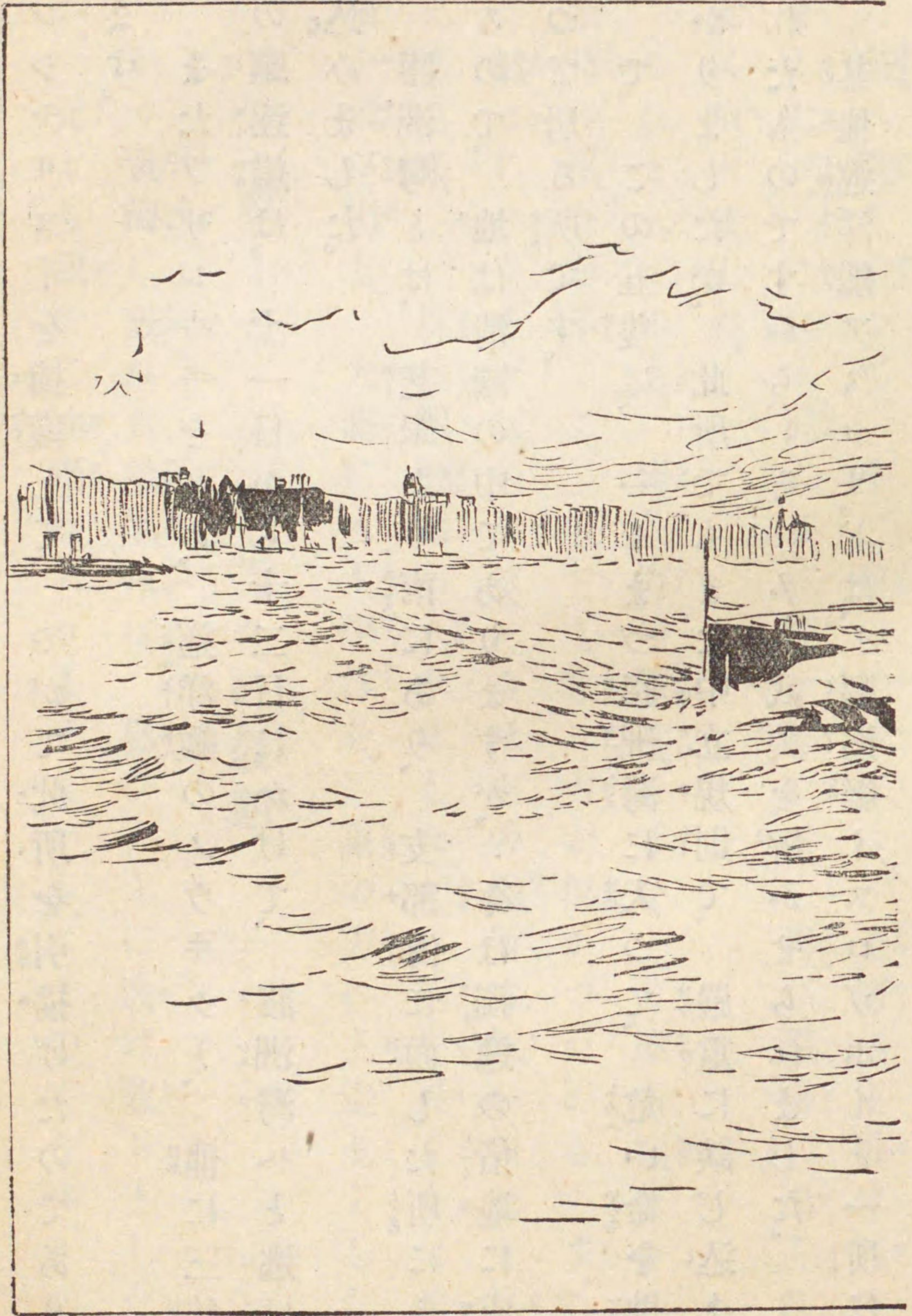
藤本中佐  
の第一驅逐隊

寺島中尉

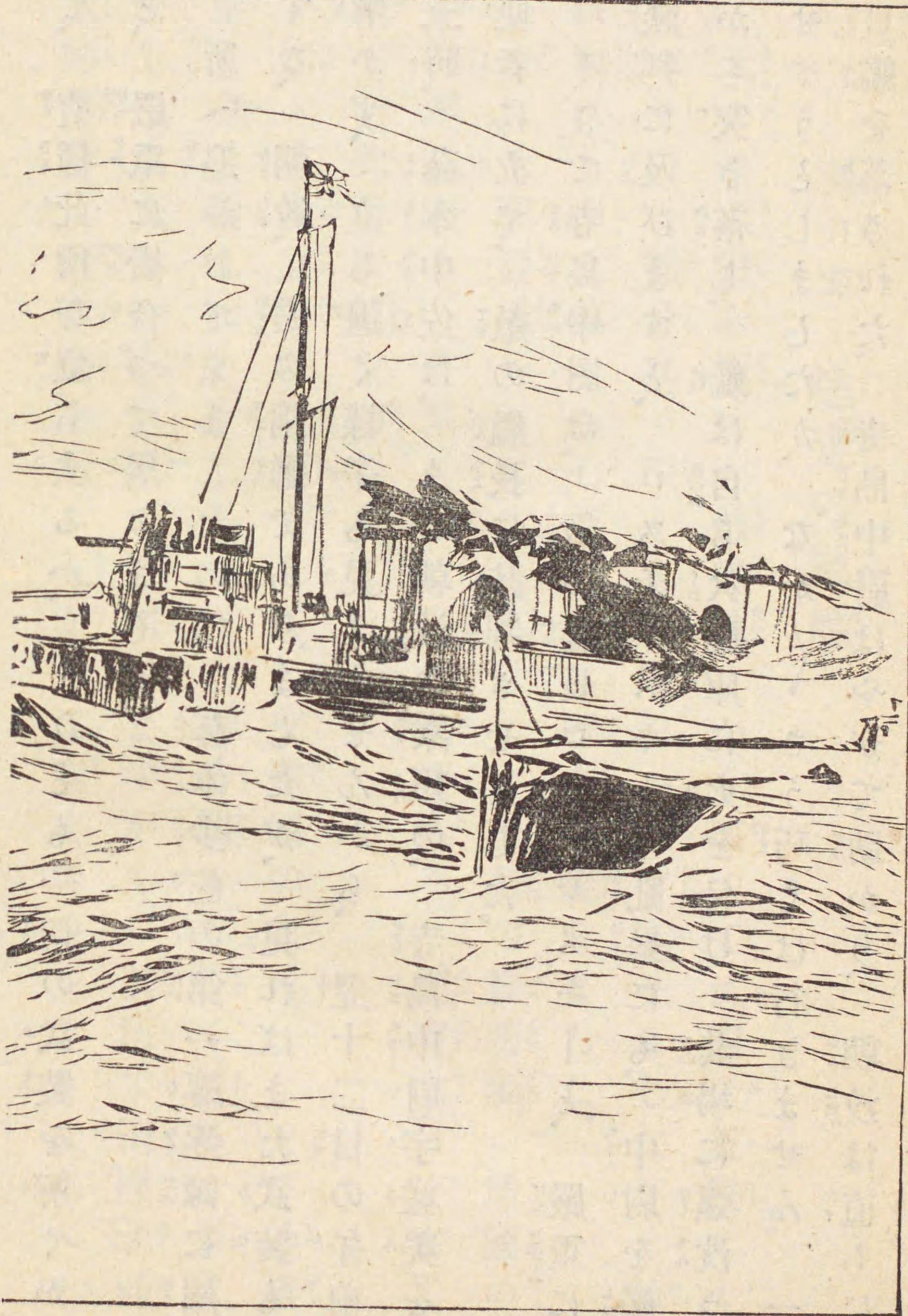
艦長ロス  
チヤスキー

第九章

て、直様此所を立ち去るか、それとも一切の武装を解くかと、嚴重に掛合つて居りました。所へ追かけて來ましたのは、藤本少佐の第一驅逐隊に屬する、朝汐、霞の兩艦でありましたが、見ればまだ武装も解かず、立ち退く様子も見えませんでした。翌十二日の午前、三時、藤本中佐は、まづ朝汐の乗組の、寺島中尉(宇瑳美)を使者に立て、敵の艦長に談判させました。そこで寺島中尉は、敵の艦長ロスチヤスキーと、嚴重に談判に及びますと、ロスチヤスキーは亂暴にも、中尉を艦から突き落とし、艦は自ら火薬庫に火を付け、其場に爆沈させやうとしましたが、なか／＼さう巧くは行きません。一旦艦を落された、寺島中尉はやがて助かり、朝汐は直ちに



獲 ヌレ  
イシ  
のテ  
捕リ



膠 洲 灣  
獨 逸 の 借 地

逃走の敵艦

レシテリヌイを捕獲して、やがて此所を引揚げたのであります。

またツザレキツを初め、巡洋艦のノウキツと、他に三隻の驅逐艦は、十一日から十二日にかけて、膠洲灣へと逃げ込みました。

膠洲灣とは、芝罘より南にあり、支那海に面した所にあるので、地は清國の中でありますが、今は獨逸の借地に成つて居る所です。

で、この五隻は、一トまづ膠洲灣に入つて、危い命を助かりました。此所でもまた中立規則で、嚴重に談じ込まれたものですから、それ〴〵武装を解かせられました。

其他巡洋艦アスコリッドは、驅逐艦イスロゾホイと一所に、

上 海

ノウキツ  
クノ逃走

ノウキツ  
クノ最期

に南へ遠く走つて、十二日の午後には、上海へと逃げ込みました。これも同じく武装を解いて、再び戦争に出られなく成りました。

これと云ふのも、皆黄海の戦で、手ひどく撃ち惱まされ、艦體の損害が多くて、とても戦ふ力が無かつたからです。

然るにノウキツばかりは、さほどの損所も無かつたと見えまして、一度は膠洲灣へ入りましたが、隙を見てまた此所を飛び出し、大膽にも太平洋を、東の方へと走りました。

第十章 ノウキツの最期

かく黄海に破れた敵艦隊は、思ひ〴〵に逃げ散りました。が、元より我れに油断はありませんから、このノウキツの



千歳艦  
對馬艦

宗谷海峽

ノウキツクの最後

飛び出したのを聞きますと、直ぐさまこれを追ひかけまし

た。即ちこの艦に向ひましたのは、上村艦隊に屬して居る、

巡洋艦千歳號と、對馬海峽の哨艦に成つて居た、對馬艦と

でありましたが、千歳は上村司令長官の命令で、まづ日本

海を真直に、津輕海峽へと來て見ましたが、まだノウキツク

の來た様子がありませんので、さては此所を通らぬのかと、

更に宗谷海峽へ向ひました。

するとその途中で、敵艦ノウキツクは、もう國尻水道を通

つたと云ふ、情報聞き込んだものですから、急いで宗谷

海峽へとさし掛つたのです。此時また對馬は、千歳とは途を變へて、津輕海峽から宗

樺太の  
ルサコフ  
港

再び港内  
に入る

谷海峽の邊を、敵を捜してまはりましたが、更に樺太のコ  
ルサコフ港をさして、航路を急いで來ます所で、恰もよし  
ノウキツクの、コルサコフを發しまして、宗谷の方へ來るの  
に會ひました。

見ると對馬は、直ちに戰鬪旗を掲げまして、凡そ一時間

許り、激しく砲戦を開きましたが、味方の弾は空弾無く、

見る／＼中に敵艦は、彈藥庫を撃たれて火災を起し、これ

はたまらぬと思つたか、再びコルサコフ港へ逃げ込みまし

た。所へ千歳が來か、りましたから、此事を信號で知らせます

と、千歳は直ぐ様後を引うけ、急いで港の方へ進みました

が、もう日が暮れましたから、其夜は港の外に居て、嚴し

第 十 章

五 一

八月二十一日

ノウキツクの最後

く警戒して居たのです。さて夜が明けてから、千歳は港内へ乗り入れて見ますと、ノウキツクは昨日の激戦に、もう戦鬪力を失つたと見えて、陸地に近い浅洲に乗りあげ、乗組員は小蒸氣に乗つて、陸へ逃げ上る所です。そこへ又一發を食らはせて、戦を挑みましたけれども、とても應戦の氣色は無く。只その艦から上る煙は、港の内に満ち渡つて、照準もつけ兼ねる位に成りましたので、更に進んで検めましたら、もはや損害甚しく、とても役には立たぬと見ましたから、やがて此所を引揚げてしまひました。時は實に二十一日の朝、彼の黄海の大戦があつてから、丁度十一日目の事で、此の死太いノウキツクも、遂に留めを刺されました。

高木大佐  
東伏見宮  
殿下  
仙頭中佐

蔚山沖

此時千歳には、艦長高木大佐(助二)の他に、兼て勇武の御聞え高き、東伏見宮殿下にも、副長として乗組ませられました。したが、また對馬の艦長は、仙頭中佐(武央)であつたのです。さても世界に未曾有と云ふべき、黄海方面の大海戦は、斯くして敵の大部分を撃破し、漸く段落を結びましたが、恰もこれと同じ頃、對馬海峡を遠くは去らぬ、朝鮮の蔚山沖で、愉快な海戦がありました。その相手こそ誰あらう、恨重なる浦鹽艦隊。味方はまたその艦隊の爲めに、幾度か無駄骨を折らせられて、時にはその名をも汚さうとした、彼の上村艦隊であります。

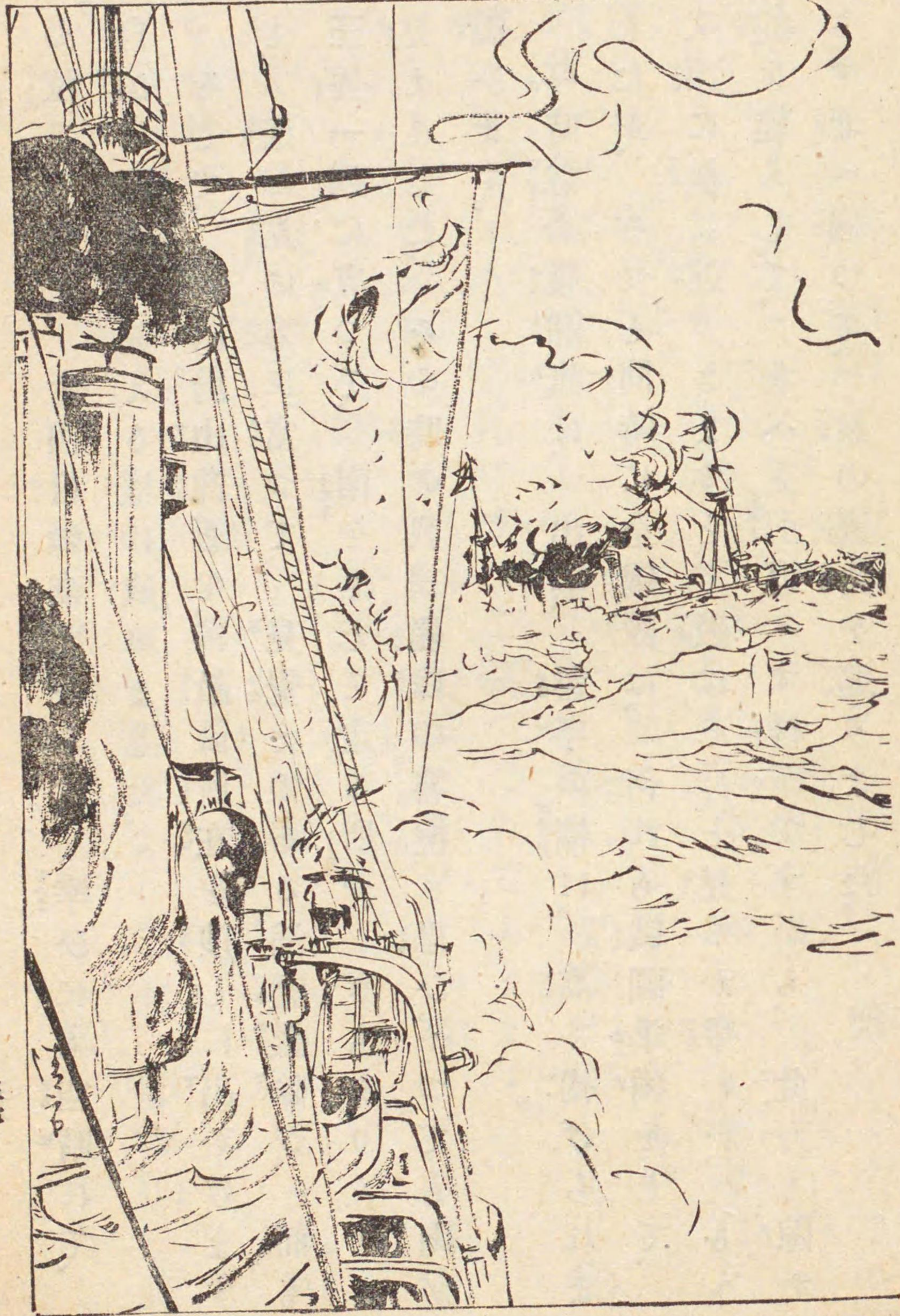
第十一章 蔚山沖の海戦

一體旅順の艦隊が、今度の大逸出を企てましたのは、元誰の命令かと云ひますと、是はマカロフの後を受けて、東洋艦隊の司令長官に成つた、彼のスクリドロフの命令でありました。

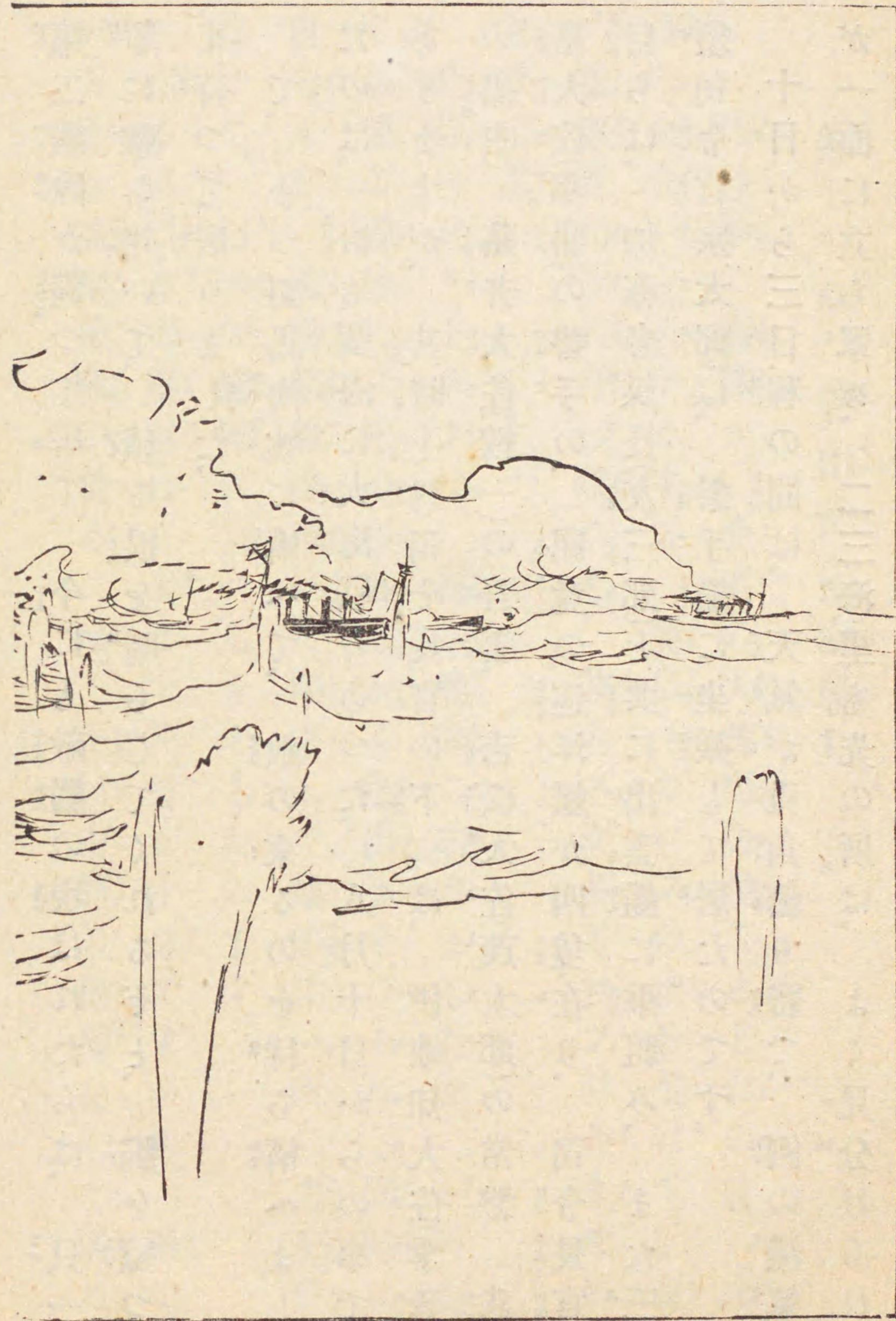
此時スクリドロフは、浦鹽艦隊に居りましたが、かうして旅順の艦隊に、その根據地から逸出させ、それと同時に自分も亦、浦鹽艦隊を率ひて南下し、途中で一所に力を合はせて、日本の艦隊に當たらうとしたのです。然るに日本の艦隊は、元より用意が十分ですから、兼てからその浦鹽艦隊の爲めには、上村中將の指揮をして居る、

上村司令官 長官 伊地知大佐 佐出雲 藤井大佐 (吾妻) 吉松大佐 (常磐) 武富大佐 (磐手) 加藤参謀 長 三須司令官

第二艦隊が備つて居て、今にも敵艦の現はれたらば、只一撃に打ち砕いて、積る恨を晴らしてくれろぞと、腕を擦つて待つて居りました。で、まづ對馬海峡に構へて、敵の來るのを待ち構へましたのは、恰も黄海に大海戦のあつた、八月十日からの事でありますが、其時上村司令長官の下には、伊地知大佐(季珍)の出雲、藤井大佐(較一)の吾妻、吉松大佐(茂太郎)の常磐、武富大佐(邦鼎)の磐手の、屈竟の巡洋艦が四隻在り、司令長官自らは、加藤参謀(友三郎)と共に出雲艦に乘組み、また三須司令官(宗太郎)は、磐手艦に坐乗して居たのです。十日から三日程の間は、天氣が兎角曇り勝で、例の濛氣が一面に立ち罩め、二三海里も先の所は、よく見分けられ



蔚山沖の海戦



十四日

蔚山沖の海戦

五八

敵艦引き返す

ぬ位でしたが、十四日の夜明からは、幸ひにも空晴れて、自由じゆいに四邊あたりが見える様ように成なりました。そこで、韓かん國こく蔚山ウルサン沖おきまで、敵てきの所在しよざいを捜さがしに出でかけますと、遙はるか左ひだりの方かたに當あたつて、見み覺おぼえのある浦鹽艦隊ウラッホ艦隊が、而しかも三隻せき一列れつに成なつて、南みなみをさして走はしる所ところが、さもあり／＼と見みえました。その時ときの我わが艦隊艦隊の喜よろこび、思おもひやつても肉にくが震ふるひます。此時このとき忽たちまち戰鬪せんとう旗きは、出い雲いづ、磐手いはての檣はしらに、高たかく掲かげられましたが、それと同時に全艦隊せん艦隊は、何なんれも戰鬪準備せんとうじゆんびをして、次第しだいに敵てきに近ちかづきますと、敵てきはそれと見みるが早はやいか、もう舵かちを旋めらして、北きたへと引返ひきかへす様子ようすですから、此方こちらも隙すかさず北きたへ廻まつて、敵てきの逃路にげみちを遮さりました。

クロシヤ  
クロムボ  
イ  
クリューリッ

見みれば敵てきの艦隊艦隊は、旗艦き艦ロシヤを先頭せんとうに、續ついてクロムボイ、リューリックの二隻ふたせき有あり丈たけの速力そくりきを出だして、北きたの方かたへと走はしりましたが、やがて午前ごぜん五時ごじ半頃はんころ、我われからまづ砲門ぱうもんを開ひらいて、戰たたかいを挑いどみましたので、敵てきも今は覺悟かくごしたもののか、同じおなく火蓋ひたを切きりまして、此所このところに激はげしい砲戰ぱうせんが初はじまり、暫しば時は雙方ふたはたとも、必死ひつしに成なつて鬪たたつたのであります。尤もつとも我わが艦隊艦隊は、始終しじゆう敵てきの前面ぜんめんに閉ふがり、巧たみに敵艦てき艦の正ただ面めんに向むかつて、用捨もち無なく砲彈ぱうだんを食くはしましたから、殆ほとんど一發いっぱつの空彈くうだんも無なく、見みる／＼中うちに敵艦てき艦は、少すこからざる損害そんがいを受うけて、如何いかにも苦戰くせんの體ていに見みえました。其中そのうちに敵艦てき艦は、もう敵てきはぬと思おもひましたか、死物狂しものくるに成なりました、辛からくもその針路しんろを轉てんじ、其所そのところを一算いっさんに逃にげ出し

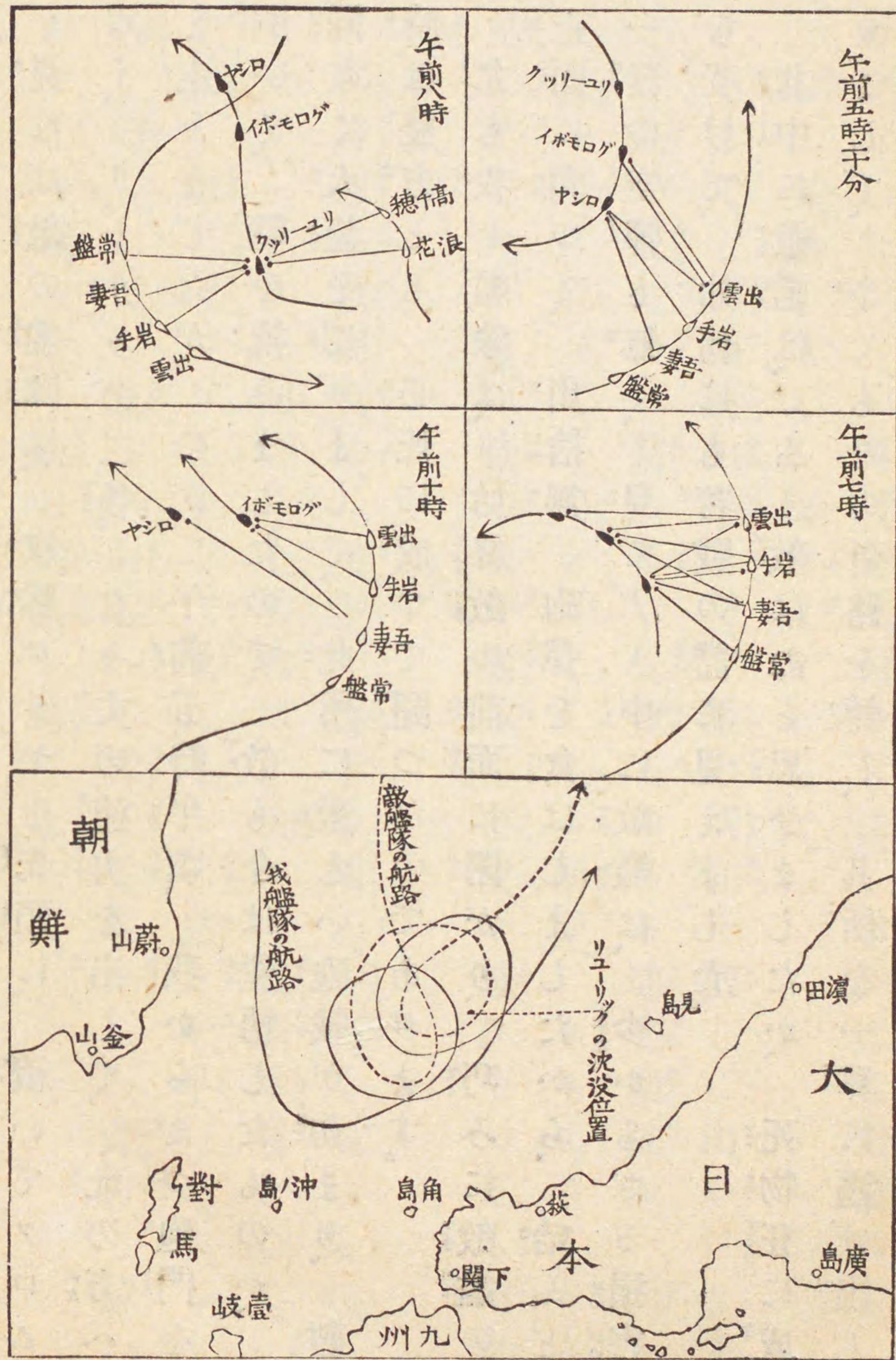
第十一章

五九

ましたが、その後陣に居たりリリックは、他の二艦に比べま  
 すと、やゝ速力が劣つて居ましたので、思ふ様に逃げられ  
 ず、獨り狼狽へて居ります中に、はや我が艦隊に追付かれ  
 て、四方から取り巻かれ、隙間も無く射撃を受けましたか  
 ら、やがて全艦は黒煙に包まれ、同じ所をクル／＼廻つて、  
 今は沈没の他はありません。流石に捨てるに忍びぬと見え、  
 これを見ると他の二艦も、夫等も亦我が砲弾に、それ  
 引返へして助けに來ましたが、天の日も燦らん許り、凄  
 ぞれ火災を起しまして、壯んに立ち昇る黒煙に、さしもの  
 廣い海原も、暫時は濛々として、天の日も燦らん許り、凄  
 ましい有様に成りました。如何にもしてこのリリックを、  
 けれども敵艦は一生懸命、

蔚山沖海戦圖

蔚山沖の海戦



海戦四時  
間に渡る  
敵艦の火

リュウ  
ツクの撃  
沈

瓜生司令  
官の第四  
戦隊  
(和  
田大佐  
浪速)

此所から救ひ出さうとして、頻りに發砲しましたが、此時も亦我が艦隊は、断えず敵の前を閉いで闘ひましたので、何時も此方に利があつて、敵の損害は増々多く、海戦凡そ四時間の間に、ロシヤは五六度、クボムボイは三四度までも、火災を起すと云ふ騒動。とてもリュウツクを助けては居られぬので、とう／＼此場を断念し、あらん限りの速力を出して、北の方へと逃げ出したのです。

第十二章 リューリックの撃沈

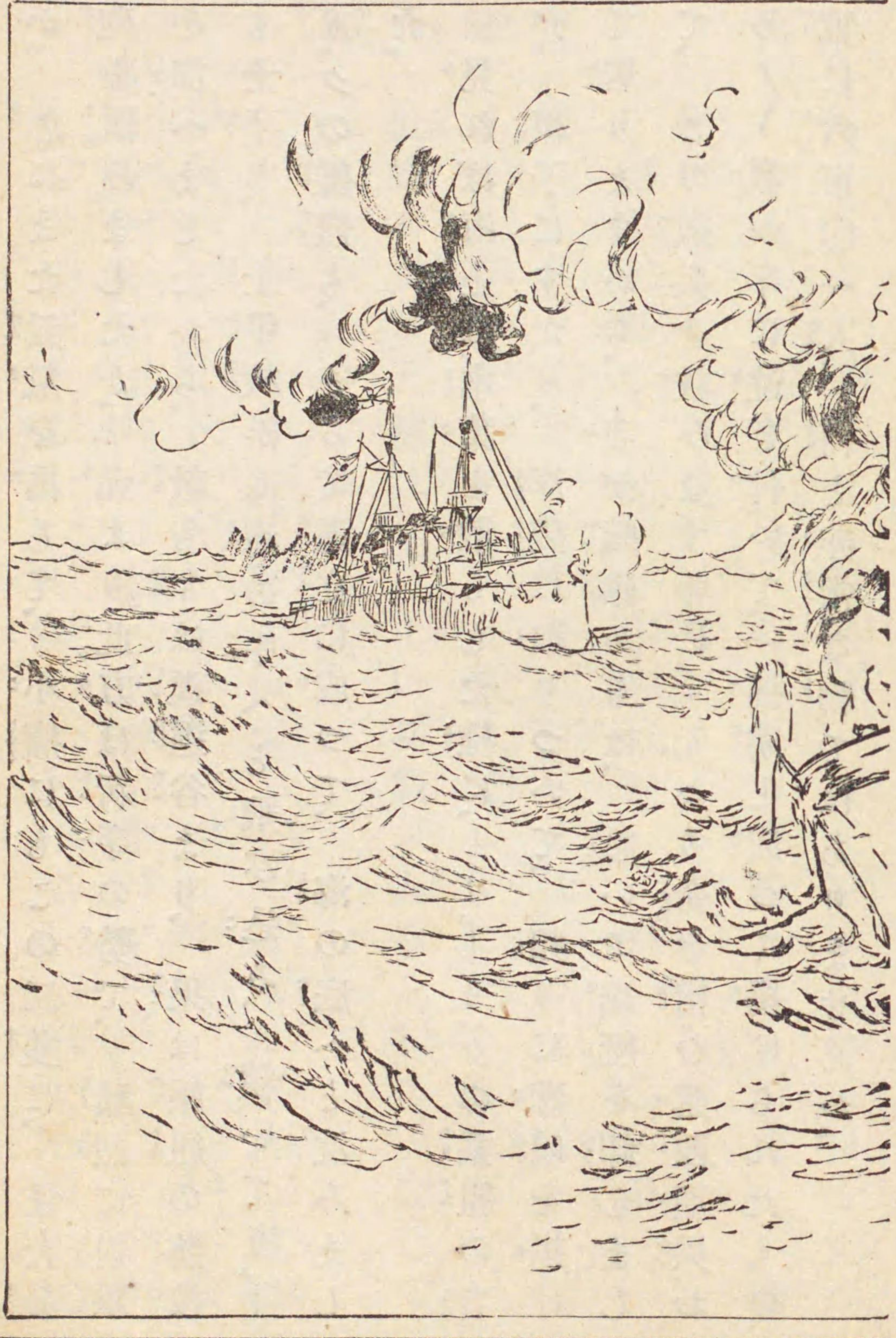
此時また此の所へ、丁度來掛りましたのは、瓜生司令官(外吉)の第四戦隊であります。和田大佐(賢助)の浪速、毛利大佐(一兵衛)の

毛利大佐  
(高千穂)

高千穂など、彼の日清戦争の時にも、勇名を轟かした軍艦が居りました、同じく戦列に加はりましたから、上村司令官は、これにリュウツクを委かせて置き、自分は以前の四艦を擧げて、ロシヤ、クロムボイの兩艦を、息をも次がず追駈けました。

然るにこの二艦は、かく損害を受けてこそ居れ、元より優れて速力の増した、有名な装甲巡洋艦ですから、一生懸命に走りますと、如何に心は焦つても、残念ながら我が艦隊には、追付く事が出来ません、追撃凡そ一時間許りで、一トまづ引返へす事にしました。

是より先リュウツクは、上村艦隊の四隻に代つて、浪速高千穂の向つて來たのを見ますと、高が二隻と侮りました



リユーリッ  
クの轟沈





六百〇一人の捕虜

リューリックの撃沈  
か、急にまた元氣を出して、小癩にもこの二隻に、また發砲を試みましたが、元より此方は新車の勢で、猛烈に射撃を加へましたから、敵も今は進退谷まり、果は乗組の將校も士卒も、上甲板から海の中へと飛び込み、續いてリューリックの艦體も、まるで逆立に成つて、海の底へと沈みまし

た。  
見れば海上は木葉を散らした様に、リューリックの乗組の者が、板子にすがり、浮袋に取りついて、頻りに悲鳴を揚げ、居りますから、我が艦隊からは、急いで端艇を卸しまして、この敵兵を救ひますのに、元より命を惜む露西亞兵、おめく、我が手に泣き付いて、捕虜と成つて揚げられたもの、實に六百〇一人、何と非常な物ではありませんか。

原口大尉  
野田少尉  
以下四十名  
戦死

けれどもまた彼等の、戦鬪力のある間は、出來得る丈鬪つて、遂にその艦を失ひ、その身も力盡きるに至つて、初めて降伏しましたのは、敵ながらも亦感心な所です。さて上村艦隊は、此所に浦鹽艦隊を、思ひの儘に惱まして、遂にその一隻を撃ち沈め、初めて日頃の恨を晴らし、兼ねては一時の汚名をも、立派に晴らすに至りましたが、而も此爲め失つた犠牲は、その功績の大なる割に、決して大くは無かつたのであります。

今その名譽の死傷者を挙げれば、上村艦隊の原口大尉鶴次野田少尉三夫以下、下士卒四十二名の戦死、野村少佐房次郎藤野少佐勇七兼坂大尉、松村候補生和介以下、下士卒五十八名の負傷、又瓜生戦隊では淺川大尉範磨の負傷を初

リユーリックの撃沈  
として、下士卒の死傷百名許り、此等の勇士の名は、蔚山  
沖の偉功と共に、長く海戦史に残さねば成りませぬ。

リユーリックの撃沈

少年日露戦史第八編完

少年軍國讀本 卷の八

巖谷小波編

勇壯なる博恭王

一 勇壯なる博恭王

八月十日の海戦は、日露開戦以來と云ふよりも、むしろ  
世界開闢以來の、大海戦でありましたが、其時我が聯合艦  
隊の中では、東郷司令長官の居た、旗艦三笠が、最も苦戦  
をいたしましたので、一時は目も開かれず、耳も聳いてしまふ  
許りに、劇しく敵弾が降りかゝりました。

此時伏見若宮、博恭王殿下には、一方の分隊長として、  
艦尾の十二吋砲を御指揮あらせたまひ、雨霰と来る敵弾を

十二吋砲

勇壯なる博恭王

敵彈殿下  
を襲ふ



勇壯なる博恭王

敵砲塔  
に中る

少年日露戦史附録

二

事ともせず、頻りに部下の士卒を勵まして、御勇戦ありましたが、その御指揮で撃ち出す弾は、幾度か敵艦に命中して、我が巨砲の威力の程を、大いにお示しに成つたのであります。

然るに、偶々敵の一弾が、我が砲塔に中りまして、邊りに働いて居た勇士をば、用捨無く撃ち斃しましたが、その時殿下にも、その砲弾の一片の爲めに、其場へお倒れに成りました。

所がその弾片も、勇氣に充ちさせたまふ、世にも貴き御身體には、流石に恐懼を爲したと見えて、肩より斜めに掛けさせられた、望遠鏡に中りました許りで、お胸にこそ痛みはあれ、何等の痕をも留めませんでした。

伊東軍令  
部長の御  
見舞

陛下の御  
褒辭

少年日露戦史附録

四

されば殿下には、一時軍醫の御介抱に依つて、御休養を遊ばしても、元氣は少しも屈したまはず、軍令部長伊東祐亨が、御負傷を承つて大いに驚き、直ちに電報を以て、御見舞申上げましたのに、殿下はまた取あへず、

『御懇篤ナル御見舞ヲ辱ウシ、拜謝ス。負傷モ幸ニ輕微、故ニ御安意ヲ乞フ』

と、御丁寧な御返電を賜はりました。

只さへ殿下の御乗組に依つて、一艦の士氣の、少からず振つて居りました所に、また斯の如く御奮戦あり、而も御負傷あらせられながら、少しも屈したまはぬ御勇壯には、誰か感奮せず居られませう。

されば大元帥陛下にも、此の目覺ましき御働きを喜ばせ

伊知地三  
笠艦長

中村敬宇  
先生の門

### 二 伊知地三笠艦長

たまひ、程無く御歸京あらせられた、この勇壯なる殿下に對して、優渥なる御褒の御辭のあつたのも、元より當然の事ではありませんか。

さてこの三笠の艦長として、同じく十日の大海戦に、名譽の負傷をしましたのは、伊知地大佐彦次郎であります。

大佐は薩摩の人で、幼少の時から海軍に志し、初め小石川の同人社に入つて、有名な中村敬宇先生の薰陶を受けました、遂に目的通り、海軍の軍人と成て、嘗て佛國に留學し、その大尉の時、伊太利の日本公使館附と成つて、彼地に赴任した事もあるのです。

伊知地三笠艦長

五

部下に敬慕さる

少年日露戦史附録

六

所が丁度日清戦争が起り、大佐は忽ち呼び還へされまし  
 たから、急いで歸朝して、橋立艦の分隊長と成り、威海衛  
 の海戦に出て、大いに勲功を顯はしました。  
 大佐は至つて磊落な質で、小さな事には少しも拘はらぬ  
 様ですが、軍事に關しては、至つて綿密丁寧で、殊に海軍  
 の書籍類は、常から熱心に研究して居るのです。  
 されば段々に出世して、帝國第一の戦闘艦、三笠の艦長  
 に成りましたも、部下の將校士卒からは、殆んど親の如く  
 敬慕されて、その人の命令には、死をも恐れぬ位でありま  
 す。それと云ふのも、大佐の部下を愛する事、さながら我  
 子に異ならず、自分の取る俸給も、大方部下を扶ける爲め  
 に、これを費して少しも惜まぬと云ふ、仁俠の心に富んで

杖に絶つて指揮す

東郷長官の信任

伊知地三笠艦長

七

居る故ですが、一つにはまた、大佐の職に忠實に、事に熱  
 心な故でありませう。  
 現に十日の戦闘の時にも、大佐は艦橋に立つて奮戦中、  
 その右の脚に重傷を受けましたが、少しも勇氣を損ぜぬ許  
 りか、その自分の負傷に依つて、士氣の沮喪するのを氣遣  
 ひ、軍醫共の止めるのも聞かず、その足には繃帶をした儘、  
 松葉形の杖に絶つて、再び艦橋に立ち、彼の戦闘の終るま  
 で、親しく指揮を執りましたのには、全艦の將卒の、大い  
 に奮ひ立つたのであります。  
 かほどの勇將でありますから、東郷長官も常から大佐を  
 頼みに思ひ、さてこそ今度の戦争に當つて、この名譽の旗  
 艦に、艦長の職を執らせたと云ふ事です。

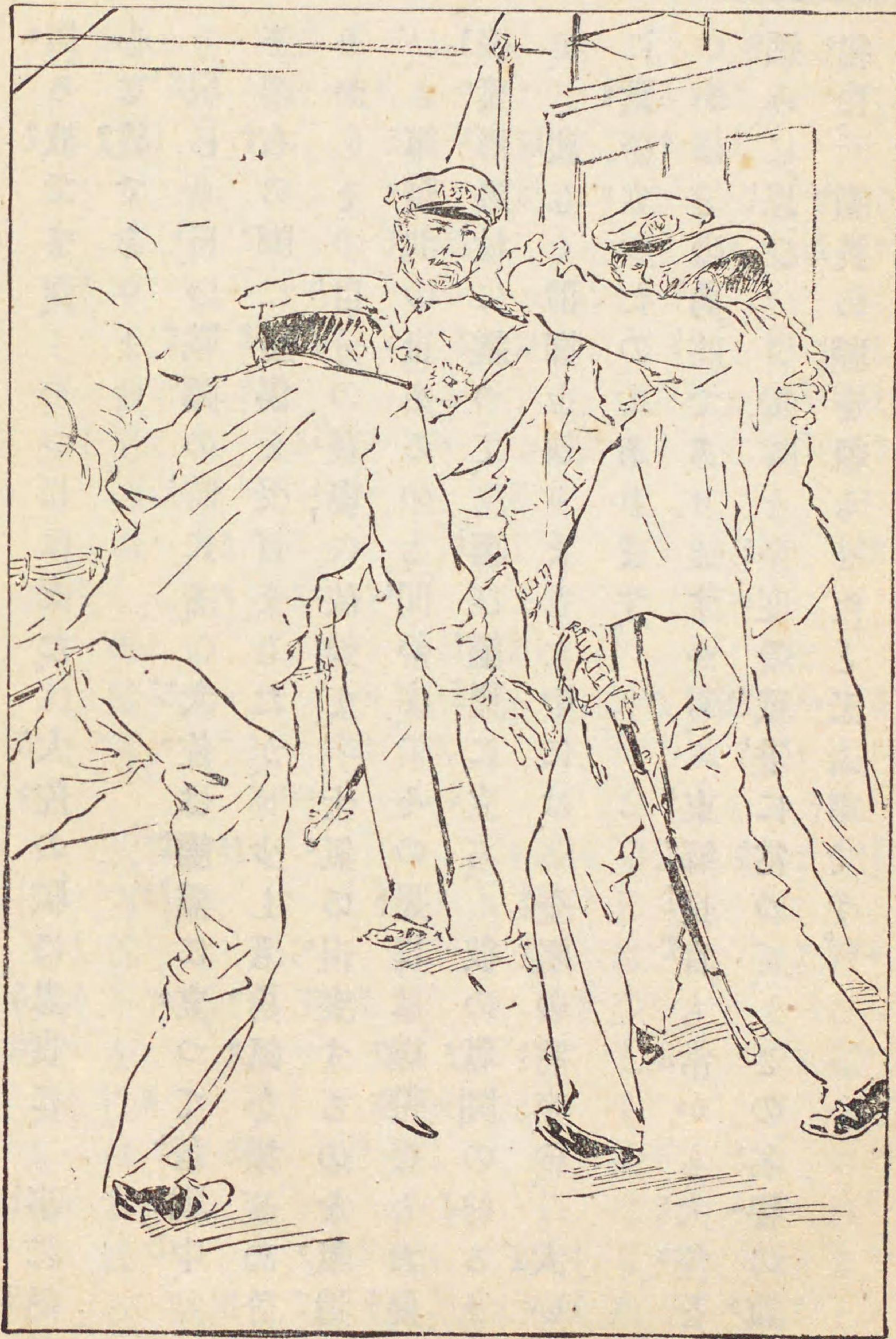
隠れたる司令長官

本 武士の標

旅順沖の大捷と云へば、直ちに東郷司令長官を想ひ、蔚山沖の海戦と云へば、即ち上村司令長官を想ひます。然るにその兩長官の間に在つて、旅順沖にも蔚山沖にも共に其名は知られませんが、而もその辛苦と功績とは、決

隠れたる司令長官

伊知地艦長の負傷



少年日露戦史附録

大佐の父は季達と云ひ、薩州でも殊に武張つた人でありましたが、大佐はその子として、身の丈六尺に餘り、肉肥え、骨太く、天晴れ武士の標本として、父に劣らぬ風采を備へて居りますが、その聲は又朗々として、一度び號令を掛ける時は、殆んど全艦に響き渡る許り。小氣味の好い勇將とは、實にかう云ふ人を云ふのでせう。

三 隠れたる司令長官

第三艦隊  
片岡八郎

少年日露戦史附録

してその兩長官に譲らず、随つて我國民の、決して忘れては成らぬのは、第三艦隊の司令長官、片岡八郎の事であり

ます。まことに片岡司令長官は、その第三艦隊を率ひて、東郷上村の兩艦隊の、共に力の及ばぬ所を引受け、その兩艦隊をして、何の心置きなく、専ら敵艦隊に當らしめたのは、全くその長官の功勞であります。

されば片岡艦隊は、今度の戦端の開かれると同時に、敵艦隊の攻撃を、東郷上村の兩艦隊に委せ、自分は本邦の近海に在つて、専ら警戒の任に當つて、萬一の場合に備へて居ましたが、元より我國は島國で、八方海を以て取まかれて居ますから、それを十分に警備する事は、なまじ戦線に

沿海警備

外科は上  
村内科は  
片岡

進んで行つて、敵と砲彈の交換をするより、却つて非常に骨が折れ、殆んど夜の目も眠らぬ位でありました。さればかう云ふ任務に當るのは、只に膽力のある許りで無く、また智識の十分あつて、用意の綿密な人で無ければなりません。然るに片岡長官は、學に精しく、耐力に富み、記憶が好くて、事に敏く、その上明白な觀察力を備へて居ますなら、實に此上も無い適任者であります。現に海軍部内にも、「外科は上村、内科は片岡」と云ふ、通り言葉がある位です。それは二人を醫者に見立てた評ですが、これを見ても、上村長官の勇猛は、以て攻撃に適し、片岡長官の沈勇は、以て防備に適して居る事が、自から解

隠れたる司令長官

長く獨逸に在り

さて片岡長官は、何所の人かと云ひますと、矢張り東郷や上村と同じく、鹿兒島藩の人であります。その初めは、西郷隆盛の亂のあつた、明治十年の事でありませぬ。其後公使館附武官として、長く獨逸國に留まり、大いに軍事上の智識を得ましたが、恰も日清戦役の初まるに當つて、急に歸朝を命ぜられ、浪速の艦長として、大に勲功を立て、既に金鷄勲章を賜はりました。人と成り至つて温厚に、徳は自ら備つて、よく部下に慕はれて居りましたが、嘗て或艦の砲術長をして居た頃、その部下の兵曹に、力飽くまで強く、酒に酔つて暴れ出すと、誰の手にも負へ無く成ると云ふ、亂暴者がありました。長

徳望

上村中將の博愛

四 上村中將の博愛

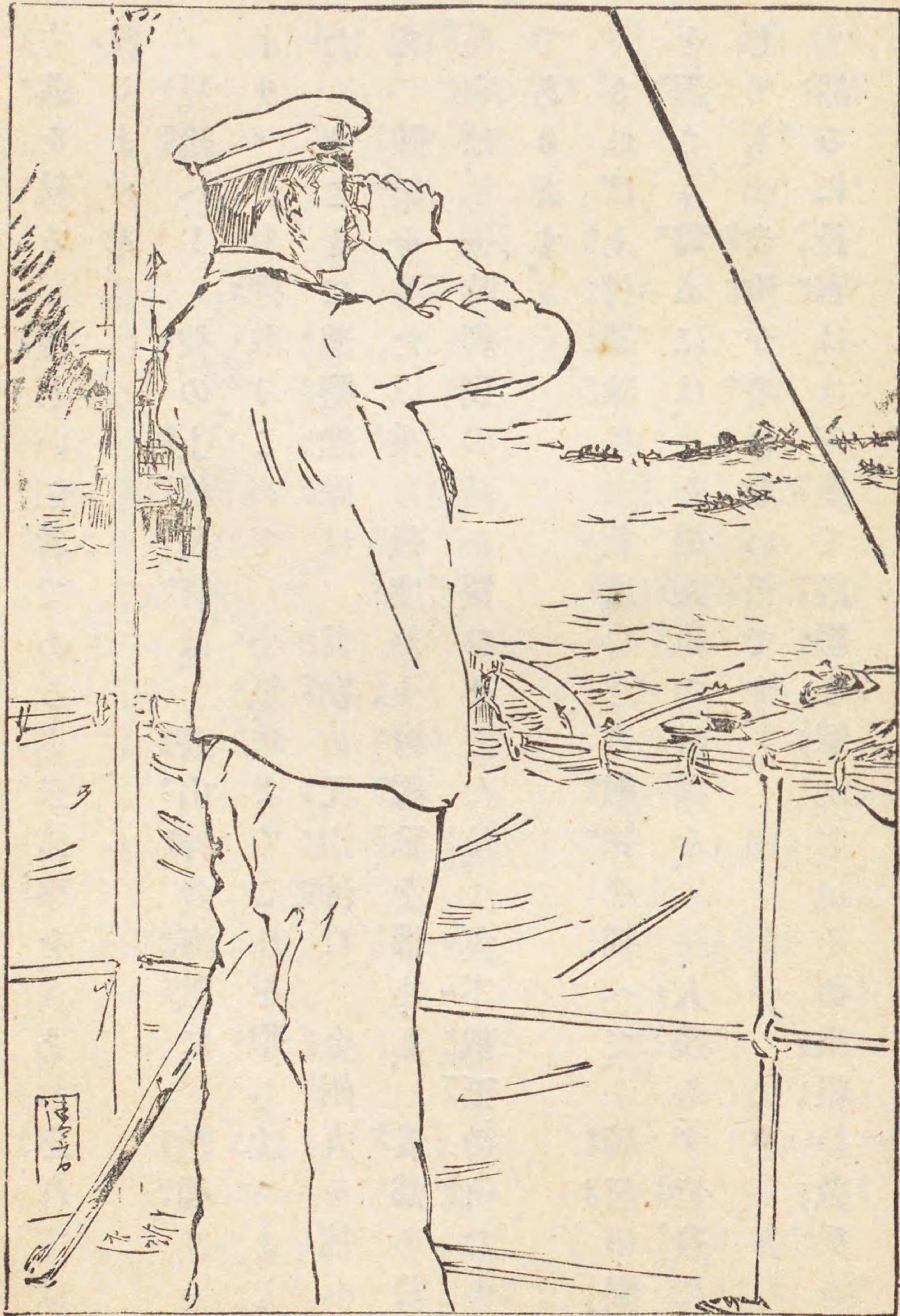
官や艦長にも、なか／＼厭しきれない位でしたが、片岡が其場へ出て、「オイ、大分酔ふたナ。」と、軽くその肩を叩くが最期、さしも虎の如く荒れ廻はつた男が、忽ち猫の様に成つて、此人の云ふが儘に、大人しく成つてしまつたと云ひます。この一事を以て見ても、片岡長官の徳望の、已に先輩を凌いで居た事が知れます。今日一艦隊の司令長官に成つて、よく重任を全うしたのも、決して無理はありません。

『外科は上村、内科は片岡』この海軍の通り言葉は、よく片岡を評し得た如く、また上村をも評し得ましたらうか。

上村中將の博愛



博愛敵兵  
を救ふ



上村中將の博愛

宰丸演説

少年日露戦史附録

一四

成る程上村長官は、只さへ血氣の薩州軍人の中でも、殊に驍勇を以つて人に知られた、稀代の猛將であります。されば日清戦役の當時、長官は尙艦長心得として、秋津洲に乗組んで居りましたが、彼の豊島沖の戦に、今や火蓋を切らうと云ふ時、部下の將卒に向ひまして、敢へて管々しい訓令を與へず、只『貴様等の宰丸は、今上つとるか下つとるか。』と、奇抜な問を出しました。これはその膽力を試み、また士氣を鼓舞する言葉であります。是こそ上村の宰丸演説と云つて、後に大評判に成つた話であります。即ち強敵に對しての事で、弱い者に向つては、また博愛の

俱不戴天  
の仇

主義を執る、優しい仁者であると云ふ事を、また忘れては成りません。

見給へ！ 彼の上村長官は、蔚山沖の海戦に、敵艦リユ一リックを押し取りこめて、小氣味よくこれを撃ち沈めました。まことに浦鹽艦隊は、其初め元山沖に、金州丸を捕へて、亂暴をした以來、幾度か上村艦隊を悩まし、其爲めに長官は、一時國民の誹を買ひました位、俱不戴天の仇なのであります。

されば上村艦隊は、此所にこの艦隊を捕へて、積日の恨を返さう爲めには、その乗組の敵兵を、一人残らず皆殺にしても、尙胸が晴れない筈です。

然るに長官は、一度で敵艦を撃沈し、その乗組の敵兵を、

海外の賞  
贊

軍艦名寄  
の歌

敷島

皆海に打ち落しますと、忽ち今までの恨を忘れ、味方の端艇を皆出して、水に溺れやうとする敵の者を、出来る丈救ひ揚げましたが、その數實に六百餘人！而もこれを手厚く介抱して、内地まで送り届けた仁慈の振舞、誰が感激せず

に居られませう。

海外諸國の新聞の、この事を傳へ記して、筆を揃へて上村の美德を稱し、長官の仁慈を稱へましたのも、元より當然の事でありませう。

五 軍艦名寄の歌

一 敷島やこと葉の花の匂ふごと  
いく千代かけて功たへん

軍艦名寄の歌

朝日 初瀬 三笠 富士 八島 出雲

少年日露戦史附録

二 ほゆる虎羽たゞく驚もおそれけん  
朝日かゞやく國の稜威に

三 さも似たり木の葉散るぞと仇艦を  
うつや初瀬の山おろしにて

四 異國の人もみかさの山の月  
昇る稜威と共に仰がん

五 神國の外には類なからまし  
富士の姿と大和魂

六 大やしま瑞穂の國はやすかれと  
祈るも賤が誠なりけり

七 八百萬出雲の神も守るらん  
まこと一條すゝめつわもの

八雲 淺間 磐手 高砂 常磐 吉野

八 日の御旗かゞやく空に八雲立つ  
勝鬨あげよ大丈夫のとも

九 淺間山絶えぬ烟のその如く  
いさを盡せぬわが御艦かな

十 日の御旗むかうところはしこ草の  
いはてもしるく伏靡くらん

十一 いまは、や國のほまれも高砂の  
松と、もにや世にひぐらん

十二 國民のかたき心も常磐なる  
松の操にうちまさり見ゆ

十三 今もなほ人はものゝふ花は又  
吉野櫻と世にぞ匂へる

軍艦名寄の歌

笠置

吾妻

千歳

寺島中尉の組打

少年日露戦史附録

十四 文よみて笠置の山をおもほへば

何か惜まん數ならぬ身も

十五 寇なせる醜のほろぶる後の世は

あつまの海も静なるらん

十六 大君の稜威かやく日の本は

千歳八千歳榮えゆくらん

(青森北谷氏作)

六 寺島中尉の組打

と覺悟を極めますと、やがて向つて來た安藝の太郎主従を、  
左の小腹に抱いたまゝ、共に海へ飛込んだと云ひます。

レシテの艦  
ヌイの艦  
長シエス  
タコウス  
キイ

自艦爆發  
の覺悟

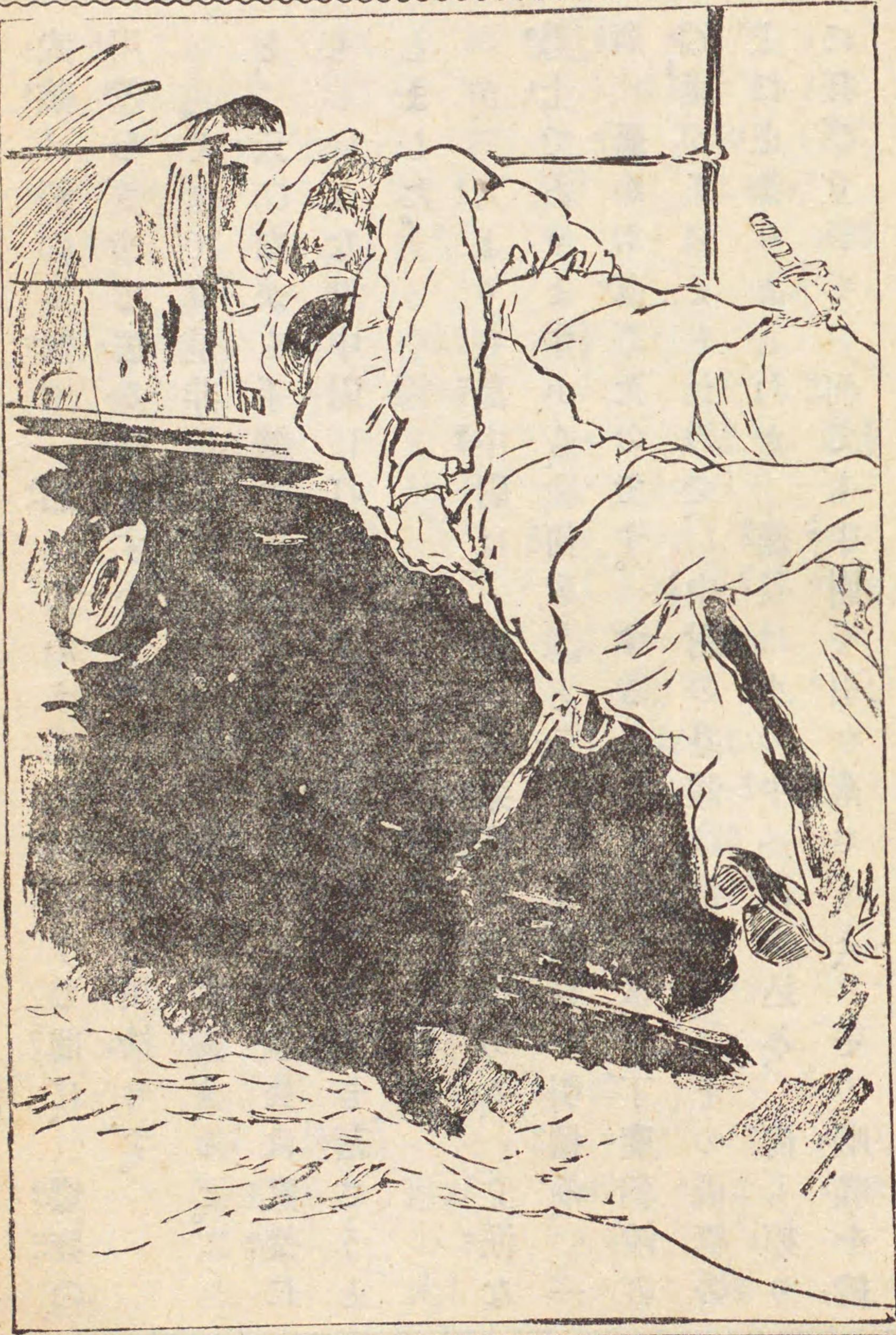
今それに似て、實は甚だこれに及ばず、却つて敵に捕へ  
られ、大いに人の笑草と成つた、露國の將校がありました。  
それは卑怯にも芝罘へ逃げ込んだ、レシテリヌイの艦長の、  
シエスタコウスキイと云ふ者であります。

初めこのレシテリヌイの、芝罘港に逃げ込みました時、  
これを此所まで追詰めて來た、藤本驅逐隊司令は、淺沙乗  
組の海軍中尉、寺島宇瑛美を使者として、通譯下士以下十  
一名と共に、敵艦さして談判に出しました。

然るに艦長シエスタコウスキイは、迎も免れぬと思ひま  
したか、急いで部下の者に命じて、自分の艦を爆發させる  
事にし、その上面倒に成つたら、腕力を以て日本の使者を、  
取つて挫がうと考へたのであります。

寺島中尉の組打

艦上の組打



寺島中尉の組打

艦長との  
談判

少年日露戦史附録

三三

所へ我が寺島中尉は、使命を帯びて乗り込んで来ました  
 が、まづ艦長に會ひまして、

「今一時間の中に此所を出て、尋常に勝負をするか。そ  
 れとも此場で降伏して、艦を日本軍に引渡すか。」

と、嚴重に掛合ひました。

すると艦長は空惚けて、

「イヤ、それには及びますまい。私の艦はもう武装を解

き、且つ機關に損所が出来て、もはや戦闘力も航海力も

ありませんから。」

と云ひますので、

「そんなら一應検めてやる。」

と、艦内を見廻はりましたが、今の言葉は皆嘘で、決して

艇朝汐の端

少年日露戦史附録

二四

武装は解いて無く、却つてかうして談判する間に、爆發の用意をさせて居る様ですから、寺島中尉は用捨せず。『それでは是非に及ばぬから、軍法通り捕獲するぞ。』と、云ひながら手續きに及ばうとしますと、艦長は亂暴にも、いきなり中尉に打つて掛り、また海中へ突き落さうとしました。

が、元より寺島中尉は、兼ねて柔術の心得ある、立派な勇士でありますから、『何を？』と云ひさま艦長を引摺み、一所に艦から落ちたのです。するとその下には、丁度朝汐の端艇がありましたが、中尉の身體は幸にも、その端艇の上へ止まりましたが、艦長は水の中へ落ち込み、尚も頻りに狂ひ立つて、何でも中尉を引き落さうと、その咽喉を締

敵艦内の大立廻り

めに掛る弾みに、誤つて指を口へ入れましたので、却つてこれを噛み切られました。その上にまた敵艦長は、右の足に重傷を受けて、再び艦に上る事は出来ず、凡そ一時間計りと云ふもの、海の中を漂つた揚句、漸く支那の軍艦に救はれ、僅に一命を拾つたのであります。また艦長と中尉とが、かうして組打をした間に、敵の水兵等も、中尉の部下に向ひまして、一度に腕力を試みましたが、彼方でも此方でも、上に成り下に成り、大立廻りが始つて、其勢に艦の上から、海へ轉がり落ちた者もあり、一時は非常な騒動でありました。その騒動の最中、艦は前部から爆發しかけましたが、此

寺島中尉の組打

二五

少年日露戦史附録  
 時早くも寺島中尉は、再び艦に歸つて居ましたので、その  
 爆発の勢に、一時は艦橋に倒されましたが、毫も屈せず立  
 ち上つて、急いで艦の沈没を防ぎ、遂に首尾好く艦を捕獲  
 して、此場を引揚げましたのは、なんと天晴な働きではあ  
 りませんか。

### 七 軍艦の説明

凡そ海軍の主力は、云ふまでも無く軍艦であります。今こ  
 またその軍艦は、目的に依て種々の類があるのです。今こ  
 れを極めて簡単に説明しませう。  
 一 戦闘艦 はその名の示す通り、戦闘を以て目的とす  
 る物であります。されば、敵を破る攻撃力と、敵を防ぐ

防禦力とが、共に十分備はらねば成りません。大きな砲  
 を据ゑ、丈夫な鋼鐵を張りつめてあるのも、全く此爲め  
 なのであります。その大きさの、一萬噸以上と、以下と  
 に依て、一等、二等に分れて居ります。

### 二 巡洋艦

十分持つて居なければ成らぬものです。これは敵の運送  
 船を捕へたり、我が艦隊の耳目と成つて、敵の様子を偵  
 察したり、また我商船運送船を、よく保護する爲めで  
 あります。中に装甲巡洋艦と云つて、戦闘艦の様に鋼  
 鐵で張つたものは、又戦闘艦と同じ働きをするのです。  
 一等は七千噸以上、二等は三千五百噸以上、三等はそれ  
 以下であります。

海防艦

少年日露戦史附録

二八

三 海防艦 と云ふのは、海岸の防禦に必要な軍艦で、攻撃力が第一、防禦力が第二、さて速度は第三に成つて居ります。尤も常に海岸に居る爲めに、艦の底を淺くして、運轉を便利にしなければ成りません。大きさは先づ巡洋艦と同じです。

砲艦

水雷驅逐艦

四 砲艦 は、おもに港灣の防禦に用ひるものです。又時としては、川の流を溯つたり、島の間を出入して、この任務を盡さなければ成りませんから、随つて大きさも千噸内外、底も淺く成つて居ります。で、海防艦にも砲艦にも、砲は随分大きなのを据ゑますが、元より目的が目的ですから、速度は至つて鈍いものであります。

五 水雷驅逐艦 は、水雷艇を追拂ひ、また進んで水雷を發射して、敵艦を襲ふ爲めの物です。ですからその艦の上には、水雷の他に速射砲を備へ、その速度の優れて居る事は、他の軍艦の追ひ付かれぬ所です。又この驅逐艦は、偵察や哨衛にも使はれますが、大きさは三四百噸に過ぎません。

水雷艇

六 水雷艇 は、薄い鋼の板で造られた、至つて軽い小艇であります。この目的は、暗夜若くは雨雪に紛れ、時として又砲烟の下を潜つて、極めて近く敵艦に迫り、魚形水雷を發射して、敵艦を轟沈させるのですから、その形こそ小さけれ、非常な功勞を顯はす事が出来ます。此種の艇にも、亦大小がありまして、大なるものは艦隊に随ひ、中なるものは、港灣の内に用ゐられ、小なるも

軍艦の説明

二九



水雷母艦

通報艦

測量艦

少年日露戦史附録

三〇

のは、艦の上に載せられてあります。

七 水雷母艦とは、實に水雷艇の倉庫とも云ふべき物で、

水雷艇に用ひられる、炭、水、食料などを、皆載せて備

へて置き、時として水雷艇の損じた時、これを修覆する

事が出来る艦です。

八 通報艦は、敵状を偵察して、これを艦隊に通じ、

或は命令を傳へるのを以て、その目的とするものですか

ら、成るべく艦を軽くし、艦脚を速くしてありますが、

戦闘力は至つて乏しいものであります。

九 測量艦は、海岸や海面を測量して、海圖材料を造

るのが、その任務でありますから、武器の代りに、測量

器械を備へて居ります。

補助巡洋艦

病院船

十 補助巡洋艦は、元と軍艦ではありませぬ。商船の

中で、構造が堅く、速力の大なるものを徴發し、これに

大砲、水雷發射管を備へ、敵國の商船を捕へたり、又偵

察に出たりして、總て巡洋艦に似た任務を執るものであ

ります。

其他病院船と云ふのは、軍醫看護卒などが乗り組んで居

て、海軍の傷兵病者を入れ、これを治療する物ですが、こ

れも元より軍艦では無く、一旦戦争が初まれば、商船の中

から徴發して、これに當てるものであります。されば如何

なる激戦中でも、此船に向つては、決して彈を撃つ事は成

らぬと云ふ、世界中の約束に成つて居る位です。

軍艦の説明

三一

勇士水雷  
を抱く  
恐るべき  
機械水雷

凡そ海戦に最も力のあるもの、即ち一番恐ろしきものは、水中に敷設して置く、機械水雷であると云ふ事は、今度の戦争に於いて、いよく確められたのであります。一萬五千噸の初瀬も、この水雷に遭ひましては、只の一发で沈められ、其爲めに貴重な戦闘員をも、一時に大勢失ひました。

で、この恐ろしい水雷は、何う云ふ形をして居るか云ひますに、式に依つて種々ありますが、帝國軍艦の苦められた、露西亞の水雷と云ふものは、大きき四斗樽程あり、それから尖つた角を出して、丁度金米糖の形をして居るもの

勇士水雷を抱く

掃海指揮官の豪膽



少年日露戦史附録

掃海隊

指揮官某

少年日露戦史附録

三四

で。これが海の中に沈めてあり、通り掛つた軍艦の底が、その角に障るが最期、忽ち火薬が爆發して、軍艦を打ち壊すと云ふ仕掛であります。

で、敵は、その恐ろしい水雷をば、旅順口の港外は云ふまでも無く、大連灣、大窑口の方までも、非常に澤山敷設して、我が艦隊の寄り付けない様に、嚴重に警備をして居りましたから、此方でも亦掃海隊を組織し、それぐに手配をして、この水雷を引揚げに掛りました。

所が初めの中は、この掃海に従事する水兵達が、何分不馴なものですから、只恐ろしいと云ふ事だけを知つて、どうも思ひ切つた仕事をしませんから、指揮官の何某は、これを齒痒く思ひまして、何うかして彼等に、かゝる危険な

水雷組織の説明

水雷も、扱ひ様に依ては、決して恐しい物では無いと云ふ事を、よく説き明かしてやり度いと思つて居ました。

すると、或る日の事、その恐ろしい奴が、丁度目の前に浮いて來ましたから、指揮官はこれを見ると、いきなり裸體に成つて海へ飛び込み、その水雷に泳ぎ付いて、金米糖の角の一を、むづと擱んで引き返へし、譯無く船の上へ抱へあげましたから、部下の水兵共は、その豪膽な振舞に、皆舌を捲いて居りましたが、指揮官はやがて部下に向ひ、その水雷の組織をば、一々精しく説き明かしてやりました。そこで部下の者も、初めて事がよく解りましたので、其後は別に恐れる事無く、我もくと先を争つて、水雷引揚に掛りましたから、その爲めにその仕事は、大層撈取つた

勇士水雷を抱く

三五

と云ふ事でありませう。  
 惜いかなその指揮官の名を、遂に聞き洩しましたか、か  
 かる勇氣があればこそ、初めてこの大役をも、無事に仕遂  
 げる事が出来たのでありませう。

少年必讀 軍國讀本卷の八完

黄海の卷

定價金拾貳錢

明治卅八年一月廿五日印刷  
 明治卅八年一月廿八日發行

著者 巖谷季雄

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所 株式会社東京樂地活版製造所



發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

小波山人 巖谷季雄君編

少年日露戰史

附軍國讀本

大判洋裝厚表紙 脊クローズ 一冊約一百餘頁

▲各洋裝脊クローズ並製大判百餘頁 正價金拾貳錢 六冊前金六拾七錢 三冊金壹圓廿八錢 郵税一冊 四錢宛

第一編 開戦の巻

▲戦争の起因 ▲三國の干渉 ▲露國の無法 ▲露西亞は何な國

▲文明と野蠻の戦 ▲艦隊の出發 ▲仁川の勝利 ▲旅順の攻撃

▲宣戰の詔勅 ▲國民皆兵 ▲新艦の到着

附録 軍國讀本

●葉山の御夢 ●東洋の子 ●敵前の尺八 ●殘る劍 ●軍歌旅順の海戦 ●下瀨火 ●薬の事 ●初瀬の初花

第二編 決死隊の巻

▲日韓の條約 ▲閉塞の計畫 ▲決死隊の出發 ▲決死隊の行動

▲驅逐艦隊の激戦 ▲間接射撃 ▲第二回の閉塞 ▲閉塞の成效

▲マカロフの死戦 ▲行軍の困難 ▲騎兵の奮戦 ▲露艦の亂暴

附録 軍國讀本

●決死隊の歌 ●勇士の膝 ●枕 ●機關兵の沈勇 ●軍神 ●の歌 ●氷割の勇士 ●大切 ●な軍艦旗 ●子供好の中尉 ●斥候の犠牲

第三編 九連城の巻

▲鴨綠江の地理 ▲海軍の應援 ▲架橋の掩護 ▲江上の大砲戦

▲九連城の總攻撃 ▲九連城の陥落 ▲蛤蟆塘の激戦 ▲敵兵の同志討

▲諸兵の苦心 ▲金州丸の事 ▲捕虜の厚遇 ▲鳳凰城の占領

附録 軍國讀本

●黒木大將 ●牧澤中尉の苦戦 ●九連城は占得たり ●大膽な斥候將校 ●武士の不運 ●裸體の武士 ●志士の情 ●戰場物語

第四編 南山の巻

▲第三回の閉塞 ▲閉塞の成效 ▲上陸の困難 ▲普蘭店の鐵道破壊

▲大戰前の小衝突 ▲金州の占領 ▲南山の大激戦 ▲南山の占領

▲第二軍の名將 ▲青泥窪占領の奇功 ▲大連灣の掃海 ▲嗚呼吉野、初瀬

附録 軍國讀本

●南山攻撃 ●伏見宮殿下の御武徳 ●島海艦長 ●勇士 ●猛士官 ●宮本武藏の末孫 ●友愛の嬉涙 ●決死の志願

第五編 得利寺の巻

▲恨は深き支海洋 ▲常陸丸と佐渡丸 ▲和泉丸と羽後丸 ▲上村艦隊の苦心

▲第二軍の新行動 ▲得利寺とは何所 ▲龍王廟の騎兵戦 ▲得利寺の激戦

▲中央隊の戦況 ▲左翼隊の戦況 ▲右翼隊の戦況 ▲戦争の結果

附録 軍國讀本

●君前の星野少佐 ●聯隊旗を焼く ●不運なる上村中將 ●敵將士の自殺 ●騎兵の奮戦

第六編 摩天嶺の巻

▲大孤山上陸軍 ▲岫巖の占領 ▲養馬集の掃清 ▲張家石の激戦

▲炎天の行軍 ▲分水嶺の戦闘 ▲摩天嶺の逆襲 ▲二度目の逆襲

▲武運強き馬場大佐 ▲橋頭の大戦 ▲滿洲軍總司令官 ▲天と時と人の和

附録 軍國讀本

●第一軍の兩殿下 ●大庭少佐の詩 ●海門艦長の最死 ●若武者 ●自ら敵陣に思死す ●兵にも豪傑 ●不思議の勇士

第七編 大石橋の巻

▲熊岳城の逆襲 ▲蓋平の占領 ▲大石橋の敵砲兵の苦戦

▲右翼隊の大夜襲 ▲月下の血戦 ▲彼我の損害 ▲營口の占領

▲橋木城と城海 ▲楡樹林子と様子 ▲ケルレルの戦死 ▲伊豆沖の敵艦

附録 軍國讀本

●野津大將 ●日本人は日本大尉の戦死 ●勇將の横に弱卒なし ●剛膽なる井上大尉 ●身を捨ててこそ極樂もあれ ●脇腹に劍の尖

續刊 ●第八編 豫告 ●第九編 遼陽の巻

●第十編 沙河の巻 ●第十一編 旅順の巻

少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戦争を書いた本であります。附録軍國讀本は、日露戦争に干渉した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

醫學博士 井上通泰先生監修

# 家庭衛生

## 第一編

- 醫學博士 入澤達吉先生
- 醫學博士 石原久先生
- 醫學博士 井上通泰先生
- 醫學博士 井上善次郎先生
- 醫學博士 土肥慶藏先生
- 醫學博士 緒方正規先生
- 醫學博士 岡田和一郎先生
- 醫學博士 岡村龍彦先生
- 醫學博士 金杉英五郎先生
- 醫學博士 片山國嘉先生
- 醫學博士 賀古鶴所先生
- 醫學博士 賀古挑次先生
- 醫學博士 田代義徳先生
- 醫學博士 長與稱吉先生
- 醫學博士 中濱東一郎先生
- 醫學博士 吳秀三先生
- 醫學博士 富士川游先生
- 醫學博士 近藤次繁先生
- 醫學博士 淺川範彦先生
- 醫學博士 青山胤通先生
- 醫學博士 朝倉文三先生
- 醫學博士 佐々木政吉先生
- 醫學博士 桐淵鏡治先生
- 醫學博士 北里柴三郎先生
- 醫學博士 木下正中先生
- 醫學博士 北島太一先生
- 醫學博士 宮本叔先生
- 醫學博士 三浦守治先生
- 醫學博士 三輪信太郎先生
- 醫學博士 弘田長先生
- 醫學博士 森林太郎先生

口繪 北里博士。長與博士。金杉博士。土肥博士。(肖像)

### 傳染病の話

- 胃の攝生法……………醫學博士 北里柴三郎先生
- 血族結婚と聾啞との關係……………醫學博士 長與稱吉先生
- 淋病と家庭……………醫學博士 金杉英五郎先生
- 眼科衛生談(第一)……………醫學博士 土肥慶藏先生
- 患者を生じたる時の注意……………醫學博士 井上通泰先生

### 雜錄

早く病氣を発見する必要○手療治の危険○醫師を選ぶ注意○醫師の命令を嚴守す○病室病褥被服等の注意○飲食物排泄物○來訪者の注意○病人に對する注意○病後の注意○體温の測り方○脈の數へ方○藥の用ひ方○氷嚢使用法○病人を清潔にする注意○傳染病の注意等

洋裝大判並一綴一冊約二百頁  
正價金拾五圓  
三冊金拾圓  
郵稅錢拾圓  
前冊六錢  
宛錢四冊一稅

# 生叢書

## 第二編

- 口繪 木下醫學博士。醫學士 宮本叔先生(肖像)
- 腸室扶斯に就て……………醫學士 宮本叔先生
- 婦人の衛生一斑……………醫學博士 木下正中先生
- 婦人及小兒の眼の衛生……………醫學博士 桐淵鏡次先生
- 眼科衛生談(第二)……………醫學博士 井上通泰先生
- (一)とり目及疳目の話 (二)孩兒の風眼 (三)小兒の眼病

口繪 三輪博士。井上博士。緒方博士。富士川ドクトル(肖像)

- 日本の室内空氣に就て……………醫學博士 緒方正規先生
- 轉地療養の話……………ドクトル 富士川游先生
- 小兒の病氣に就て二三の注意……………醫學博士 三輪信太郎先生
- 小兒の衛生に就て……………醫學博士 弘田長先生
- 遺尿症に就て……………醫學博士 朝倉文三先生
- 眼科衛生談(第三)……………醫學博士 井上通泰先生

雜錄 ○婦人の衛生に關する雜話  
(一)初めての月經 (二)一般の月經 (三)結婚

家庭に衛生上の智識の必要なることは言ふを俟たず此衛生上の智識の實に一日片時も家庭に應用せられざることなく住居を選び衣服を製り食物を調理するに於て是の衛生上の智識を應用せば家庭の幸福は殆んど測り知るべからざるなり其他小兒を育つるに於て傳染病の流行する時に於て病人の發生せし時に於て婦人の妊娠時に於て吾人の家庭は衛生上の智識を要することを證據立てる機會は日常甚だ多大なるを知る是れ本書を刊行して博く家庭必讀の要書に充つる所以なり

參謀總長元帥山縣侯爵題辭

# 日露紀念寫真帖

大本營陸軍部  
許可 第壹卷 既刊一第貳卷 最近發行

定價一冊金壹圓貳拾錢 小包送拾五錢

洋裝大判總クロロス金文字金模樣表紙每號  
寫真銅版百面アト純彩色寫真十枚挿入

本書は空前の壯舉たる征露戦役の真相を活寫して永く天下後世に傳へんが爲めに大本營陸軍幕僚の御藏版に係る撮影を蒐め精巧美麗なる寫真銅版となして逐次發行するものにして、第一卷收むる所は第二軍の鹽大澳上陸より金州南山の激戦、ガルニーの占領、得利寺の奇捷、偕は蓋平大石橋の戦を経て、營口占領に至る迄の戦況風光を網羅して遺す所なく、此等の諸寫真は他に絶無にして獨り本館に於てのみ之を有する者、加ふるに製版は斯術に於て海内無比の稱ある所の關西印刷合資會社の手に成り裝幀亦優雅堅牢を旨としたれば眞に絶好無二の紀念帖たり、宜しく家々人々一本を備ふべきの寶典也

## 博文館 編輯局 編纂 旅順降伏紀念帖

口繪(旅順降伏兩軍全石版)權委員の會見

旅順從軍畫家東城鉦太郎氏筆

- 旅順口攻撃軍の主腦
- 同攻撃艦隊の主腦
- 旅順口攻撃軍師團長
- 旅順口攻撃艦隊司令官
- 旅順口攻撃旅團長諸將
- 聯合艦隊參謀諸將

- 二百三高地より旅順口港内下瞰(二百懸け)
- 露國關東要塞司令官陸軍大將ステッセル少壯時代以降の寫真六種
- 旅順口攻撃軍諸將
- 攻撃右翼軍の猛將
- 攻撃軍中堅の勇將
- 攻撃左翼軍の勇將
- 旅順口攻撃軍將校

正價金貳拾錢 郵稅貳錢  
附錄(其一) 旅順附近戰圖詳圖  
地圖(其二) 旅順要塞詳密圖

- 旅順口攻撃艦隊の諸將
- 旅順口攻撃艦隊の諸艦と艦長(其一)
- 旅順口攻撃艦隊の諸艦
- 乃木攻圍軍司令官最近の筆蹟(其二)
- 外に福原霞外君、英人二氏、山中古洞君、中澤弘光君、若林一等水兵、木村光太郎君筆……
- ……戰爭實寫畫

露國 レオ、トルストイ伯原著

日本田 山 花 袋君譯述

## 哥薩克兵

哥薩克兵!! 哥薩克兵!! 其名既に世に轟鳴して人

其兵士の勇驍無雙なるを聞くこと久し矣、而して今や我國征露の勞頭に於て親しく此兵の強弱怯勇如何を目撃して國民の話題に上り其性行を知らんことを欲せり乃ち本書を介して世の劉覽に供す。

全一冊 洋裝 正價金拾八錢 郵稅四錢

高加索嶺の北、露領の最南端一國あり、「コサツク」州といふ、多く美人を産す、世界第一の稱あり、是を以て露國士官の「アブリーク」に防禦の爲めこの州に送られたるもの、大概鷲鷹の盟を兵馬控備の間に締せざる者なし。レナ、トルストイ伯は露國の詩人、十九世紀錚々たる大詩人なり、而して其作「コサツク」兵は實に此間の消息を陳べて神來の詩想を婉麗なる筆に描出したるものなり。讀み來れば忽ちにして砲聲忽ちにして美人、忽ちにして葡萄園下の逍遙となり、忽ちにして「アブリーク」人攻撃の出兵となり、忽ちにして戰鬪大叫喚、少女の血涙となりて了る、凄絶慘絶、眞に不可言の妙あり。

博文館編輯局編纂 (遞信省認可)

## 日露海戰史

太陽判二百四十頁  
口繪寫真版二十頁  
正價金參拾錢  
郵稅參錢

◎評論 海戰に關する内外評論家及軍人の開始 最近の戰況に至るまで最も趣味多きを親睹するの感あらしめ讀み來つて、掲げ精忠實日の 〇史傳 海軍將校の勳功を詳叙す 〇雜纂 海戰に關する軍器軍艦の說明 〇地理 博するに至れる所以を知らしむ 〇地圖 鮮明精確の圖を以て海戰の狀況を明示す 〇日誌 〇其他海戰に關する事項一切を網羅す

伊東軍令部長題辭 平田勝馬君著

## 黃海大海戰

洋布上綴八百頁  
正價金九拾錢  
小包送貳拾錢

野津陸軍大將序文 藤野房次郎君著

## 平壤包圍攻撃

洋布上綴八百頁  
正價金七拾錢  
小包送拾五錢

史戰國萬兌發館文博

●松井廣吉君著  
英佛聯合 征清戰史

英佛聯合軍が支那を征伐し北京城下の盟をなさしめし顛末を詳叙し、  
兩軍の遠征隊組織、作戰方略等を掲げたる完全なる戰史にして、且  
つ構難の原由、外交の掛引、輿論の冷熱等をも細記しあり

●越山玉坡隱士譯述  
ナイル海戰史

本編は英國海軍大將ネルソン氏の四大海戰の一たるナイル戰史を譯  
述したるもの事實壯絶譯文快絶數十の戰艦狂瀾怒濤を掀翻して縱橫  
奔馳するの狀躍々として紙上に現出し筆端硝煙湧き砲彈飛び句々活  
動字々悲鳴讀み去り讀み來り憂然聲あり

●波蘭衰亡戰史

是れ露國慣用政策の顯著なるもの一にしてアウガスタスガ王が瑞  
典の地を獲んと欲して露のポートル大帝と同盟せしより禍源を生し  
たる事、露國が御爲めゴカシに内事に干渉したる事、遂に獨露國の  
爲めに分割せらるゝに至るの顛末を記述せり

●印度蠶食戰史

雄圖を懷抱せる英國印度を併呑せんとし、クライブ、ヘスチング、  
ウェルリントンの諸豪傑相率いで出で、殆んど三百年の日子を費して遂  
今日東洋に勢力を振ふ所以をも知るべし、國家の衰亡國民の萎靡する所以

●希臘獨立戰史

世界最舊の文明國たる希臘も、羅馬に呑まれ、土耳其に壓せられ、  
文化傑然たる事業、空しく斷壊廢址の裏に没し、寒風寂莫轉た志士  
の腸を斷たしめしが、傑人一たび奮つて人民之に和し、遂に獨立の  
國を立て、遙かに三千年前の文明を憶ふ

●普塿戰史

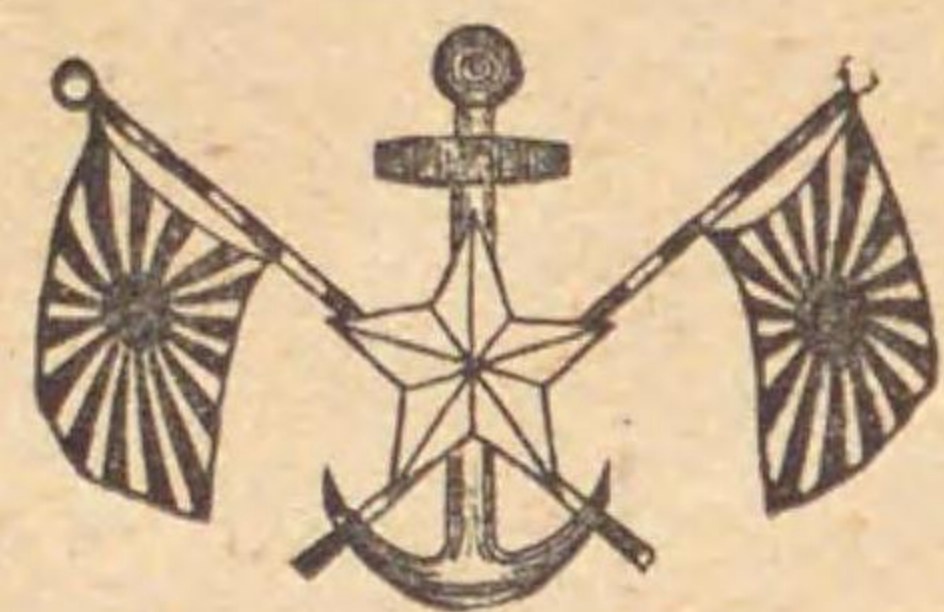
先づ普塿兩國舊來の關係及其近狀を記し丁抹戰爭より雌雄を争ひ其  
開戰の原因激戰奮闘を叙し拿破崙ビスマークの兩雄が互に智略を闘  
はせて相欺くことモルトケ將軍が空前の戰略を運らすこと遂に大敵  
に勝ち一躍して第一等國に昇る事情を詳記す

●七年戰史

普王フレデリック、英邁不世出の資を以て、國運を勃興し、歐洲の  
大半を敵として、七ヶ年の勇戰を爲したる。雄大壯快の事蹟を詳叙  
したり。大王が快爽たる英姿活くるが如く、千軍萬馬紙上に躍る。

●希臘波斯戰史

波斯王、大軍を率ゐて希臘を征す。希臘は、國小に人寡しと雖も、  
愛國の衷情、寡能く衆に敵し、大に波斯軍を破り、波斯王をして、  
懲りて兩ひ手を出すこと能はざらしめたり。本書は此の顛末を敘述  
したるものなり。



次編 第九編 遼陽の卷 二月  
第十編 沙河の卷 三月  
第十一編 旅順の卷(上) 四月  
第十二編 旅順の卷(下) 五月





